

# 僧肇記「法華翻經後記」偽撰説の全貌と解明

金 炳坤 (慧鏡)

## §1 問題の所在

鳩摩羅什と最も親密な師弟関係にあったと言われている僧肇は、『妙法蓮華經』が漢訳される当時の、世には知られざる逸話(=エピソード)をまとめ、それを後記(=エピローグ)にして書き残している。『大正新脩大藏經』第五一卷所収の『法華傳記』巻第二に「法華翻經後記」というタイトルで収録されているこの記事のなかには、鳩摩羅什が『妙法蓮華經』を漢訳する際に所依とした「梵本法華經」[=「SPS. K<sup>(1)</sup>」]と、婆藪槃豆が『妙法蓮華經優婆提舍<sup>(2)</sup>』を撰述する際に所依とした「梵本法華經」[=「SPS. V」]とが、正しく同じもの(=正本)である[=「SPS. K」≡「SPS. V」]という一文<sup>(3)</sup>が記されている。

筆者は以前、羅什の述懐として僧肇が記しているこの伝承(=史的典拠)に着目し、本記事に対する真偽(=両底本の同一本説)を検証すべく、比較文献学の視点より『法華經』の梵・漢・藏、諸テキストを用い、両底本の同一本如何を検討してみたことがある<sup>(4)</sup>。その結果、諸師諸説<sup>(5)</sup>に同じく「両底本は同一本ではない」つまり、「正本とは容認し難いものがある」という結論に達した。このように、記事と事実とがそぐわない、記事そのものに対して不具合が生じたことから、その原因を究明するとともに記事の信憑性を確かめるべく、「法華翻經後記」の記事全文を再考していく過程で、これが僧肇に権威をかりた偽作・偽撰である

(1) 以下、鳩摩羅什の所依梵本を「SPS. K: *Saddharma-puṇḍarīka-sūtra* according to Kumārajīva」と、婆藪槃豆の所依梵本を「SPS. V: *Saddharma-puṇḍarīka-sūtra* according to Vasubandhu」と略記する。

(2) 予想される梵題「\**Saddharma-puṇḍarīka-sūtra-upadeśa*」、サンスクリット原典もチベット語訳も現存せず、二種[=①・②]の漢訳が現伝するのみ。

①『妙法蓮華經論優婆提舍』一卷 婆藪般豆菩薩造 元魏中天竺三藏勒那摩提共僧朗等譯

②『妙法蓮華經憂波提舍』二卷 大乘論師婆藪槃豆釋 後魏北天竺三藏菩提留支共沙門曇林等譯

但し、『至元法寶勘同總録』巻第八に「梵云薩怛囉二合 麻 遼怛唎迦 沙悉特囉・・〈中略〉・・右二論同本異譯與舊本同」(S.2 no.25 p.227c, ll.18-25)とあり、十三世紀末頃までのチベット語訳本の存在が窺われる。また、漢訳は「①主訳②重訂 説」(伊藤瑞叡 [1983] p.1213)が有力であって、敦煌出土写本[散 697]の題記に「大魏永安元年(CE.528)歲次戊申十二月 洛陽永寧寺譯 執筆人比丘僧辯」(『敦煌編年』p.190)とあることから、②の訳出年代が推定できる。

(3) 『法華傳記』巻第二に「昔婆藪槃豆論師。製作『優婆提舍』。是其正本。莫取捨其句偈。莫取捨其眞文。」(T.51 no.2068 p.54b, ll.11-12)とある。

(4) 立正大学仏教学部仏教学科仏教思想歴史専攻コース、平成十八年度卒業論文(指導教員三友健容先生)『法華論』の研究 ―『法華論』の底本に関する一考察― 現在、立正大学仏教学部懇談室に複写物が保管してある。

(5) 「現行梵本近似説」(木村光孝 [1940] pp.104-141)、「正法華同本説」(吉田龍英 [1941] pp.291-293)、「正法華近似説」(坂本幸男、岩本裕 [1962] pp.427-428)、「独立異本説」(清田寂雲 [1973] pp.373-390)、「別底本説」(藤井教公、池邊宏昭ほか [2001] pp.110-112) (藤井教公、池邊宏昭 [2002] pp.93-95)

という確実性が高まってきたため、その詳細を以下に論究していきたい。

## §2 研究の意義 — 偽作・偽撰説の一端 —

『法華翻經後記』に対する不審の念は、古く平安末・鎌倉初期の天台宗の学僧證眞による指摘にはじまり<sup>6)</sup>、これを普寂 (CE.1707-1781) が引いている<sup>7)</sup>。また、筆者が知り得ている関連諸説のうち、注意すべきものを示せば、第一に「法華傳二 (續藏二乙七342 右) に僧肇の作として法華翻經後記を載せたり。然れども是れ妄に什譯の妙經に二十八品存せしこと、天親製論の所依たること等を證せんとするものにして、妙句私記十本 (佛全762) 及び妙句復眞鈔六 (同373) の疑議せる如く、古録に録せず且つ諸師の引用することなき等によりて之を偽妄に屬するを可とすべきが如し。<sup>8)</sup>」と、第二に「諸師序集第六の中に、僧肇記と稱する法華翻經記なるものあり、羅什譯法華經は元より二十八品ありしことを述べてゐる一文を以て、提婆品挿入説に反對する一典據としてゐるが、これは偽作だろうとの説がある。<sup>9)</sup>」と、第三に「また「法華經傳記」卷二、諸師序集の中に、法華翻經後記、釋僧肇記<sup>(大正五、五四頁上)</sup>をおさめてゐるが、記末に「冀通方之後賢。不咎其差違。流行之處。必有感應矣」とするが如きよりしても、後世の偽託であることは明かである。<sup>10)</sup>」と種々の指摘がなされている<sup>11)</sup>。

しかしながら、上記の諸説は、夫々が一・二点の事例を挙げているに過ぎず、問題に対す

<sup>6)</sup> 『法華疏私記』卷第十本に「囑累經中甚明鏡矣。但此後記眞偽未詳。雖載法華傳。而人多不信彼傳。故亦不信後記文也。如等此記。竝載古今集傳及出三藏記等。而彼不錄諸師不引。又別行後記本。王問什答中不云普門偈事。正經亦無普門品偈。不可詳議也。」(NB.22 p.212a, ll.1-5) とある。なお、刊本「大正大学附属図書館蔵本 (1142/207) 『三大部私記文句十』 (三十五丁)」も同様である。

<sup>7)</sup> 『法華文句復眞鈔』卷第六に「法護本欠普門偈。什本所缺。藥艸喻半。富樓那法師等二品之初。提婆達多品。普門品偈。添品望妙經五異。一加藥艸喻半。二提婆品入寶塔品。三陀羅尼品次神力後。四六篇呪文不同。五囑累安後若依古本無普門品偈。○私記 (三十六) 添品序。然此後記眞偽未決。法華傳文人多不信。且古今集傳。及出三藏記不錄之。不足據。私記引衆說會釋且明記文左右。可尋。」(NB.23 p.373b, ll.19-p.374a, l.3) とある。

<sup>8)</sup> (大野法道 [1914] p.8) 仮名使いは原文のママ。

<sup>9)</sup> 『佛解』10, p.80a (道端良秀 [1935]) 仮名使いは原文のママ。

<sup>10)</sup> (牧田諦亮 [1955] p.273) 仮名使いは原文のママ。

<sup>11)</sup> その他、偽作・偽撰説を言及するものに「肇論の外に僧肇撰の名で今日に傳つてゐるものに 1 註維摩詰經十卷 2 百論序 3 長阿含經序 4 寶藏論一卷 5 梵網經序 6 金剛經註一卷 7 法華翻經後記 (法華經傳記所收) 8 鳩摩羅什法師誄などがある。…〈中略〉…寶藏論以下は僧肇の眞撰とは認め難いものである。」(塚本善隆 [1955] pp.146-149)、「また『法華經傳記』卷第二には僧肇 (三八四～四一四) の著として 法華翻經後記 釈僧肇記 が収録されているが、これには羅什訳「二十八品」説がみえ、この書を偽作とする説がある<sup>38)</sup>。」「(38) 小野玄妙編『仏書解説大辞典』第十卷、昭和八年、八〇頁 (道端良秀博士解説) 参照。」(丸山孝雄 [1978] p.16, 38 注(38))「(七) 僧肇 (三八四～四一四) 羅什の門下。四傑の一。『法華翻經後記』『法華經傳記』卷第二、収録) を著わす<sup>2)</sup>。」「(2) 偽作説がある。」(古田武彦 [1998] p.48, 126 註(2)) というような論拠無き論説が知られる。仮名使いは原文のママ。



る充分な論究、かつ明確な論拠が示されていない。この点からも解明を促し解答を求める研究として、僧肇記「法華翻經後記」の偽作・偽撰説をめぐる真偽の検証は、意義をもつと言えるのではなからうか。

### §3 「法華翻經後記」の基礎的研究 — 其の一 テキストの集成 —

さて、この「法華翻經後記」は単独としては例がなく、唯一、僧祥撰集『法華傳記<sup>(12)</sup>』巻第二の「諸師序集」のなかにしか収録されていない。問題は、両者とも古経録にその記載を見出すことができず、現蔵録に『法華傳記』の入蔵が確認できるのも編纂の新しい『大日本續藏經』以降のものでしかないというところにある<sup>(13)</sup>。

『法華傳記』のテキストは、『大正新脩大藏經』の底本<sup>(14)</sup>として用いられた「慶長五年刊大谷大学図書館蔵本」(余大 423)と「東大寺図書館蔵古写本」(111/153)とがあり、『佛書解説大辭典』にもこの二種のテキストを挙げている<sup>(15)</sup>。但し、「大谷大学図書館蔵本」は、慶長

(12) 「法華經の翻訳、分訳流伝または講解誦誦した人などの伝記・靈驗を十二項にわけて述べる。著者の事跡・生没年代は不明であるが、「講解感応」に天台宗八祖の玄朗(CE.672-753)について載せている点から開元 713-41・天宝 742-56 の頃に成立か。」(『総合佛教大辭典』p.1312a)、「撰者僧詳の事蹟年代明ならずと雖も、本書新録所載の玄朗の入寂が唐天寶十三(CE.754)年なるを以て推するに、撰者は略は同時に康存せしものなるを知るを得べく、即ち惠詳の弘贊法華傳撰集の後を承けたるものといふべし。」(『望佛』5, p.4585a) (··)括弧内は自らが付したもの。仮名使いは原文のママ。

(13) 『大日本續藏經』第老輯 第貳編乙 第七套 第四冊 (pp.336-386) = (影印)『大日本續藏經』第 134 冊 (pp.672-772) = (影印)『中華大藏經』第三輯 第一八三・一八四冊 (No.1109, pp.101354-101454)、『大正新修大藏經』第五一卷 (No.2068, pp.48-97)、『新纂大日本續藏經』第七七卷 (No.1538, pp.723-773) なお、「佛教藏經目録數位資料庫」[http://jinglu.cbeta.org/]での検索結果は以下の通り。【古経録】「出三藏記集、衆經目録(法經)、歴代三寶記、衆經目録(彦琮)、衆經目録(靜泰)、大唐内典録、續大唐内典録、古今譯經圖紀、續古今譯經圖紀、大周刊定衆經目録、開元釋教録、開元釋教録略出、大唐貞元續開元釋教録、貞元新定釋教目録、續貞元釋教録、傳教大師將來台州録、傳教大師將來越州録、日本國承和五年入唐求法目録、慈覺大師在唐送進録、入唐新求聖教目録、新編諸宗教藏總録=未收録」、【現蔵録】「房山石經、開寶藏、崇寧藏、毘盧藏、圓覺藏、趙城金藏、資福藏、磧砂藏、宋藏遺珍、高麗藏、普寧藏、至元録、洪武南、永樂南、永樂北、嘉興藏、嘉興(新)、乾隆藏、縮刻藏、正藏、大正藏、佛教藏、中華藏、新纂三藏=未收録」ちなみに「東京大学史料編纂所」[http://www.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/]で検索できる「古記録フルテキストDB、古文書フルテキストDB、奈良時代古文書フルテキストDB、平安遺文フルテキストDB、鎌倉遺文フルテキストDB」からも『法華傳記』の記録は見出し得ない。

※ とくに、日本の龍堂編輯『山家祖徳撰述篇目集』巻下に、覺超 (CE.955[960]-[1034]1037) 撰として「法華傳記」(NB.2 p.275a, l.11) とあるが、『本朝台祖撰述密部書目』に、彼の「法華宗傳記(別本无之)」(NB.2 p.241b, l.17) が知られることから、『法華宗傳記』の略記と解される。また、高麗の義天録『新編諸宗教藏總録』巻第一に「法華經」傳十卷 慧詳述 (T.55 no.2184 p.1169a, l.24) とあるが、これは慧詳の「弘贊法華傳」十卷 (T.51 no.2067) のことである。[...]括弧内は自らが補ったもの。

(14) [T.51 p.48 脚註②]「◎慶長五年刊大谷大學蔵本、◎東大寺蔵古寫本」

(15) 「◎慶長五刊 (①[大]谷大[学図書館]、餘大・四二三) (②[大]正大[学Lib.]、——四二・二六一) (③[京]都大[学Lib.]、藏・二四ホ・五) (④[龍]谷大[学Lib.]、二九五三・七[現在 295.3/7-W]) (⑤[高]野山大[学Lib.]、寄・一・二一) 古寫本 (東大寺) (『佛解』10, p.80c (道端良秀 [1935])) 「◎現所蔵者 (書庫名)」丸囲みの番号及び[...]括弧内は自らが補ったもの。仮名使いは原文のママ。

五年に刊行された「要法寺版」そのものではなく、その異版<sup>(16)</sup>である。なお、現在「要法寺版」と認められるものは、「国立国会図書館蔵本」(WA7-23)のみである。刊本には、このほかに「要法寺版」をもとにした「本能寺版」の二種が知られるが、体裁・内容ともに「要法寺版」を外れない<sup>(17)</sup>。また、写本には、「東大寺図書館蔵本」のほかに、三点<sup>(18)</sup>が知られるが、巻第二を有するのは「西教寺正教蔵文庫本」(法華疏6)のみである。

<sup>(16)</sup> 前掲の注<sup>(15)</sup>に挙げた五点(=①～⑤)に加え、⑥龍谷大学図書館(296.4/58-W)、⑦⑧立正大学大崎図書館(A76/102, A76/9)、⑨西教寺正教蔵文庫(法華疏4)、⑩⑪東京大学附属図書館(C40-2682, C40-586)、⑫駒澤大学図書館(H224/5)、⑬東北大学附属図書館(2/3002/3)、⑭立正大学法華經文化研究所(玉沢文庫寄託本)にも同版による刊本が所蔵されている。現存する四種の刊本中、その数が最も多い(以下、「現行刊本」)。なお、開版年の確証が得られないが、②大正大学附属図書館蔵本の巻尾に肉筆で「元祿十二己卯年[CE.1699] 九月十五日 長壽院日■(花押)」とあることから、その下限を推量することができる。[・]括弧内は自らが付したもの。

<sup>(17)</sup> 「現行刊本」を除いた三種の刊本の概略は以下の通り。①【慶長五年刊要法寺版】「法華經傳記 慶長五年[CE.1600]刊古活字印本 十卷五冊 釋圓智撰 帝國圖書館藏 單邊、無界、十行十八字。管見に入れる唯一の傳本は帝國圖書館蔵本にして、原書皮を存し、尼崎本興寺舊藏。各卷末に、「主選傳(印)」、十卷末に、「日深(花押)」、各巻首に「尼崎本興寺常住(本興)」識語あり。全卷朱墨點書入あり。卷末に、慶長五年圓智の刊語存す。即ち、本書は、要法寺開版書中最古刻にして、後出の諸刻本、本書の開雕に使用せる活字を襲用せるもの多し。(川瀬)『善本影譜』p.3)さらに(川瀬一馬[1933] pp.6-7)に詳しい。なお、『佛解』10, p.46b)に「(帝國、一六六・二五三)」とあるが、同本か否かは確認できない。②【慶長十九年刊本能寺版】叡山文庫天海藏書(立正大学法華經文化研究所蔵複写製本—表紙及び巻頭の二枚のみの製本)、『日本書誌学用語辞典』に同じ魚尾を有する同版の巻末の図版(288(左) p.261)が載っており、刊記「慶長十九(甲寅)[CE.1614] 孟冬仲三日洛陽 釋露閑誌」の確認ができる。なお、『天台書目』(p.1105a)の「ロ」の項目に「①谷大」、「②正大」、「④龍大」をも「慶長十九年刊本能寺版」とするのは誤り。③【寛永三年刊本能寺版】叡山文庫比叡山真如藏書(立正大学法華經文化研究所蔵複写製本)刊記に「寛永三(丙寅)[CE.1626] 極月吉日此法華傳記洛陽於本能寺 開判露閑」とある。西尾市岩瀬文庫(134/46)にも同版による刊本が所蔵されている。[・]括弧内は自らが付したもの。

<sup>(18)</sup> ①【金澤文庫本】三卷三帖「卷四、五、九」(34-2-1, 2, 3)、「法華經傳記(第四・五・九)三冊 唐慧詳撰 湛春手澤本[=所持本]」(惠谷隆成[1935] pp.196)、「書写本(他筆)法華經傳記 三卷三帖」(納富常天[1970] p.5)所持者湛春の行跡に「称名寺第三世湛春[CE.1271-1346]は泉州久米多寺禪爾[CE.1253-1325]の高足であるが、東大寺凝然[CE.1240-1321]にも師事した。」(納富常天[1976] p.1)とあることから、東大寺図書館蔵本との関連性が窺われる。②【西教寺正教蔵文庫本】十卷三冊(法華疏6)、各冊の巻末に三種の奥書があり、本文と同筆で最も古い題記に「于時正慶二年[CE.1333](癸酉)二月三日」とある。③【大須文庫本】六卷三帖「卷三、四、五、六、七、八」(重要文化財「指定番号:2128、枝番:07、指定年月日:1964.01.28」)、国文学研究資料館が有する資料の請求記号は(278-3-1)である。巻四の題記に「建長八年[CE.1256](丙辰)五月十五日 南剎書寫了 乘忍生年■五」とある。以上の三本は、東大寺図書館蔵本の後(十三世紀から十四世紀の間)に書写されたものであり、写本の調査により、東大寺図書館蔵本との類似性が顕著な同系統であることを確認した。[・]括弧内は自らが補ったもの。仮名使いは原文のママ。

※ 久寿二年(CE.1155)に、慈悲寺の源西によって編まれ、嘉禎三年から翌四年(CE.1237-1238)にかけて、深賢と宰相公とによって書写された、現在醍醐寺に蔵する孤本『探要法花驗記』上下二冊(第167函)にも『法華傳記』からの引用「卷一、二、三、四、五、六、九、十」が確認されており、その底本が東大寺図書館蔵本の系統であることが指摘されている。(馬淵和夫[1985] pp.270-271) 参照。但し、「法華翻經後記」からの引用は見当たらない。



ちなみに、中国・朝鮮半島における現伝本の存否有無は、調査が充分でないため判然とし  
ないが<sup>(19)</sup>、今のところ『法華傳記』は確認できていない。とくに筆者は、今後の研究課題と  
して掲げている「法華章疏の研究 第Ⅱ篇 散逸法華章疏の研究」のために「西域出土漢文文  
献法華章疏」を諸目録より見出し、その写本（＝影印）を蒐集しているところであるが、そ  
のなかからも『法華傳記』なるものは見出せなかった。ただ、目録に「法華靈驗記<sup>(20)</sup>」と題  
する残簡が一点知られるも実際に写本の影印による確認の結果『大唐内典録<sup>(21)</sup>』であること  
が判明した程度である。無論、中国・朝鮮半島での欠損の可能性も考慮しなければならない  
が、以上の調査結果からすると、単に欠損と看做すには事足りない唐代の成立とする既成の  
見解に新たな問題を投じるものがある。

#### §4 「法華翻經後記」の基礎的研究 — 其二 テキストの校訂 —

『法華傳記』は未だ国訳をみていない。したがって本節では『法華傳記』の諸テキスト<sup>(22)</sup>  
を用い、「法華翻經後記」の本文批評（text critic）を行うとともに校訂テキストを製作し、次

<sup>(19)</sup> ①【台湾】「國立故宮博物院 善本古籍資料庫」[http://npmhost.npm.gov.tw/ts/npmmeta/RB/RB.html] で  
の検索では、検索語「祥(1478 件)」のなかから、慧祥の『古清涼傳』一件「統一編號：故善010548、  
題名：古清涼傳 二卷、著者：撰述者；(唐)釋慧祥 撰、版本：清嘉慶間阮元進呈明天順刊本、數量  
尺寸：總冊數；一冊」[http://libdb2.npm.gov.tw/tswweb/K3A010548N00A.JPG] が見出されるが、『法華傳  
記』はなく、「詳(1073 件)」・「法華(68 件)」・「傳記(1825 件)」からも『法華傳記』は見当たらない。

②【中国】中国全土 698 機関の蔵書凡そ 29 万点が検索可能な「中國古籍善本書目聯合導航系統 2.01  
版」[http://202.96.31.45/] での検索では、「祥(510 件)」・「詳(247 件)」・「法華(9 件)」・「傳記(4 件)」  
の何れの検索語にも該当するものはない。③【韓国】「國家記録遺産」[http://www.memorykorea.go.kr/]  
での検索では、見出し得ない。ちなみに「法華經 五種法師會」[http://cafe.naver.com/bubhwa] による  
『法華傳記』巻第六「長安大寺比丘尼妙法十四」までのハングル訳がネット上に公開されている。

<sup>(20)</sup> [P3898]「題名：法華靈驗記、本文首尾：且誦臨～中徹引、行数：70、一紙：縦 28.0 cm 横 41.0 cm 行  
数 28 界高 25.0 cm、備考：仮題、首尾欠三紙、第一紙二五行の下辺三～一〇字下欠、第二紙二八行下  
辺所々欠、第三紙一七行末尾六行下欠、無界、一行二三～二五字内外、内容は梁齊魏隋から唐貞觀年  
間までの法華誦誦書写などの驗記、紙背は開元七年・八年受田人別帳、黄紙、唐代。」(『兜木』p.223)、  
「R：(㊦㊦持誦法華經靈驗記) V：(㊦㊦開元間戸籍)」(『東洋』25, p.276)、「持誦法華經靈驗記」(『東  
洋』29, p.77)

<sup>(21)</sup> [P3898]『大唐内典録』巻第十、本文首尾：且誦臨訖滿～徹引至山中(T.55 no.2149 p.339a, l.23 - p.340b,  
l.15)、影印は『法國國家圖書館藏敦煌西域文獻』② (pp.118-119) に収録されている。

<sup>(22)</sup> — 現存本『法華傳記』の二系統について —

テキストは以下の二系統に分類できる。【Pb.系統】『證眞『法華疏私記』(以下、「㉔」)＝普寂『法華  
文句復眞鈔』(以下、「㉕」)＝日蓮『後五百歳合文』(以下、「㉖」)＝日蓮『注法華經』(以下、「㉗」)  
＝「要法寺版」(法華傳卷二、五(左右)～六(右)丁；以下、「㉘」)＝『大正藏』㊦本・「大谷大学図  
書館蔵刊本」(法華傳卷二、四(左)～五(左右)丁；以下、「現行刊本」)＝『大日本續藏經』(Z.1-2-2-7-4  
p.342rb, ll.11-18 - p.342la, ll.1-12；以下、「統藏經」)＝『大正新脩大藏經』(T.51 no.2068 p.54a, ll.24-29 -  
p.54b, ll.1-18；以下、「大正藏」)＝『新纂大日本續藏經』(SZ.77 no.1538 p.729a, ll.4-23；以下、「新  
統藏」) ≠ 【Ms.系統】[『大正藏』㊦本・「東大寺図書館蔵古写本」(以下、「㉙」)＝日蓮『一代聖  
教大意』(以下、「㉚」)＝「西教寺正教蔵文庫本」(以下、「㉛」)] なお、全文が記載されていない「㉔・  
㉕・㉖・㉗・㉙・㉚・㉛」は校訂に用いない。「Pb.」は(Printed book)、「Ms.」は(Manuscript)の略語。

第に書き下しを試みることにする。校訂テキストは『大正蔵』を基準とし、諸テキスト間の相違は注に明らかにする。なお、本文の送り仮名は『新統蔵』より採用したものである。

#### 法華翻經\*後記\*四 釋僧肇\*記<sup>(23)</sup>

弘始八年夏。天竺沙門三藏法師耆婆鳩摩羅什。秦言童壽。於長安大寺草堂之中。與生肇融叡等八百餘人。四方義學英秀二千餘人。俱再譯斯經。與衆詳究。什自執梵本。口譯秦語。姚興自執舊經。以相讎校。定新文。文義俱通。妙理再中矣。興詔什曰。君觀所譯二十八品。文義美明宗體自彰。乍觀護經。以序品。稱爲光瑞品。藥草喻品。末益其半品。化城喻品。題往古品。富樓那及法師初。增數紙文。闕略普門偈。囑累還結其終。未測旨歸。其事如何。什曰。善哉明主。續法燈長炎。曉暗夜迷景。自非發疑。誰明深旨。勘舊梵文。宛若斯。予昔在天竺國。時遍遊五竺。尋討大乘。從大師須利耶蘇摩。洎稟理味。慇懃付囑梵本。言。佛日西入。遺耀將及東北。茲典有緣於東北。汝慎傳弘。昔婆藪槃豆論師。製作優婆提舍。是其正本。莫取捨其句偈。莫取捨其眞文。予忽忽忝受之。負笈來到。今所傳。良有所以。詮定宗旨。不\*同異途。呂恐聖旨。待冥可否。夢惑遍吉稱可。深會佛旨。具爲釋義。與主開朦。義學伏膺。捨舊本。翫新文。覆勘再授。今講肆次略記由來。冀通方之後賢。不咎其差違。流行之處。必有感應矣。<sup>(24)</sup>

<sup>(23)</sup> 「①・⑧」には「法華翻經記 釋僧肇」とある。「①・⑧」には「花」とあるが、その他のテキストには「華」とある。「①・⑧・『大正蔵』」には「翻」とあるが、その他のテキストには別体の「翻」に作る。その他、題目に付される『大正蔵』の校勘記\*は以下の通り。【T.51 p.54 脚註⑦】「〔後〕-④、【T.51 p.54 脚註⑧】「〔四〕-④、【T.51 p.54 脚註⑨】「〔記〕-④」

<sup>(24)</sup> 『大正蔵』には「忽忽」とあるが、その他のテキストには俗字の「念念」に作る。また、「①・⑧」はこれを欠く。『統蔵経』・『大正蔵』・『新統蔵』には「同」とあるが、「⑨・『現行刊本』・①・⑧」には「可」とある。また、以下の『大正蔵』の校勘記によると、④本の380字に対して④本に321字あるとするが、文字数を数えてみると、322字と数えミスが見られる。これを実際に「①」（＝立正大学法華経文化研究所蔵複写製本）に戻って調査し、もとは323字あることを確認した。また、校勘記には、本来示すべき異文が示されていないなど不備が指摘できるため、「①」及び同系統の「⑧」を用い、これを訂正し、校訂を行った。訂正記号は以下の通り。[・(=・)]：脚註と「①・⑧」との相違箇所。[・(=・)]：「①・⑧」に校合の痕跡が見られる箇所。[・(=±・)]：「①・⑧」に略字に作り一文字として表記される箇所。なお、本稿における「Ms.系統」の本文引用は以下の校訂に順ずる。

※【T.51 p.54 脚註⑩】「《弘始…矣》三百八十字＝《弘始八年夏天竺沙門三<sup>(10)</sup>藏法師耆婆鳩摩羅什[秦言童壽(=ハル⑧)]於<sup>(20)</sup>長安大寺草堂之中與生<sup>(30)</sup>肇融叡等八百餘人[四(=⑧)]方<sup>(40)</sup>義學二千餘人俱出斯經<sup>(50)</sup>與衆詳究什自手執梵本<sup>(60)</sup>經[曰(=①)]譯秦語與自手執舊<sup>(70)</sup>經以相[讎(=讎①・⑧)]校新文異舊義[義(=トハ①・⑧)]<sup>(80)</sup>悉圓通與[曰(=①)]若觀所譯[廿(=±二十①・⑧)]<sup>(90)</sup>八品文義美自乍見舊經<sup>(100)</sup>藥草[喻(=ハル⑧)]品末益其半品富[樓(=①)]<sup>(110)</sup>那及法師初增數紙文[闕<sup>(120)</sup>略(=略闕⑧)]普門偈屬累結其終未<sup>(130)</sup>測深意什曰善哉明君良<sup>(140)</sup>續法燈長開悟迷徒勸舊<sup>(150)</sup>梵本若斯予昔在天竺時<sup>(160)</sup>[從(=ハル①・⑧)]<sup>(170)</sup>湏(=須①・⑧)]利耶蘇摩洎受理味<sup>(170)</sup>摩頂屬累此經言佛[曰(=日①・⑧)]西<sup>(180)</sup>隱遺光照東北茲典有緣<sup>(190)</sup>於東北諸國汝[眞(=眞①・⑧)]傳弘昔<sup>(200)</sup>婆藪槃豆[并(=±菩薩①・⑧)]製論正是斯<sup>(210)</sup>本[也(=ハル⑧)]莫取捨眞文吾恭[洎(=ハル①・⑧)]<sup>(220)</sup>稟<sup>(220)</sup>之今所傳詮定宗旨不[了(=可①・⑧)]<sup>(230)</sup>有異途一品半二品初古<sup>(240)</sup>有今無不[了(=可①・⑧)]間糅屬[累(=ハル⑧)]次神<sup>(250)</sup>力[復(=後①・⑧)]亦不可改移普門偈<sup>(260)</sup>與長行乖違恐聖旨待



『大正蔵』の㊟本として用いられた「現行刊本」のもとである「要法寺版」は、刊記に「慶長庚子載季春望日 洛陽 釋圓智誌<sup>(25)</sup>」と示されるが如く、一六〇〇年に圓智によって刊行されたことが判る。また、『大正蔵』の㊟本である「東大寺図書館蔵古写本」は、巻第四の奥書と巻第五の内題とに「大治五年<sup>(26)</sup>」と、さらに各冊の表紙裏書には「文永二年<sup>(27)</sup>」とあることから、一一三〇年に書写が完了し、その後一二六五年には、宗性によって表紙の作り直しなどの修繕が施され、現在に至っていることが判る<sup>(28)</sup>。なお、その表紙には「沙門釋宗性」と本人の筆跡で名が記されている<sup>(29)</sup>。「要法寺版」をもとにする諸テキスト（＝「Pb.系統」）は、一・二点の文字の相違を除けば、ほぼ一致していると言えるが、一方の「東大寺図書館蔵古写本」（＝「Ms.系統」）になると、『大正蔵』の異常な校勘記<sup>(30)</sup>からも解るように、相互間の文字の出入が甚だしく、とくに、後半になればなるほど著しい相違が認められる。またその分二系統（＝「Pb.系統」≠「Ms.系統」）の論調も大分異なってくる。したがってこのような不備のもとでは、校訂テキストの製作が困難であるため、本稿の§7・§8では、双方の書き下しを提示し、二系統の相違を明白にしたい。

冥<sup>(270)</sup>〔了(=可①・㊟)〕否夢感普賢稱譽〔深(㊟㊟)〕會<sup>(280)</sup>佛旨〔具(=ハム㊟)〕爲釋義〔已(=王①・㊟)〕〔即(=ハム①・㊟)〕開解義<sup>(290)</sup>學伏膺覆勘重校是以於<sup>(300)</sup>講次疏以爲記冀通方之<sup>(310)</sup>賢不咎其差研依新以爲<sup>(320)</sup>規〔模(=模①・㊟)〕矣 三百二十一字㊟

(25) 「要法寺版 (WA7-23)『法華經傳記』五冊 (法華傳卷十 十七(右)丁)」、「現行刊本 (A76/102)『法華傳記』下 (法華傳卷十 十七(右)丁)」、「統蔵經」(Z.1-2-2-7-4 p.396la, l.14)、『大正蔵』(T.51 no.2068 p.97a, l.12)、『新統蔵』(SZ.77 no.1538-Ap.773c, l.5) ここでいう洛陽とは京都を中心とする関西一帯を指す。

(26) 卷第〔五(=四)〕【T.51 p.66 脚註②】「法字前行甲本有大治五年四月十〔五(=二)〕日一〔校(=交)〕了僧花押僧祥撰集十九字」、卷第〔七(=五)〕【T.51 p.77 脚註⑥】「法字前行甲本有大治五年(歲次辛〔戌(=亥?)〕)四月十一日書寫畢花押一校〔已(=ハム)〕了二十一字」〔大治五年(庚戌)、大治六年(辛亥)誤記か〕、卷第十【T.51 p.97 脚註③】「《唐僧…誌》百二十八字＝《大治五〔年四(=ハム)〕月十四日〔出〔窓(=寫?)〕事(=書留了)〕一校了〕十五字㊟」〔卷第五より卷第四の校了日が一日早い〕〔…(…)〕括弧内は (平岡定海 [1960] p.12-15) をもとに訂正した箇所。

(27) 〔卷第七〕【T.51 p.77 脚註⑦】「轉字前行甲本有僧祥撰集文永二年(乙丑)三月二十日〔于(=午)〕時於海住山十輪院結構表紙奉書外〔題(=願)〕〔號(=畢)〕法印宗性三十七字〕〔…(…)〕括弧内は (平岡定海 [1960] pp.12-15) をもとに訂正した箇所。

(28) 宗性が『法華傳記』を手にした経緯に関する具体的な論及は、(平岡定海 [1960] p.672) に「また今度の笠置寺にいつた理由は彌勒如來感應指示抄第一のために天福元年〔CE.1233〕正月十一日に、この中に組込れたいと考えていた弘贊法華傳、法華經傳記については笠置寺護法藏本によるべきであると考へたために、この指示抄第一の完全を期待するための登山であつた。」と推考されている。とすると、それまでには東大寺に『法華傳記』がなく、これを探し求めてようやく入手できたのは、文永二年ということになる。ちなみに、『彌勒如來感應指示抄』に「法華翻經後記」からの引用は見当たらない。〔…〕括弧内は自らが付したものの。仮名使いは原文のまま。

(29) また、内表紙には「傳得僧增仁之 僧澄運矣」と二人の僧名が見えるが、事績不明である。

(30) 前掲の注<sup>(24)</sup>参照。「法華翻經後記」以外には、卷第三の「隋天台山國清寺釋智越」での字句の相違が指摘できる。【T.51 p.59 脚註④】「《貴師…化》二百字＝《豈諱不停房舍每處山間林樹之下專修禪寂三十年中常坐不臥或時入定七日方起具向師說所證法相有人聽聞曰如汝所說是背捨中出二觀相亦有山祇數相繞試宴坐怡然不干其慮大善業七年二月三十日卒于國清春秋六十六智者門徒極多故敘其三數耳》百六字㊟

# §5 「諸師序集」にみる二系統の体裁の相違について

「Pb.系統」と「Ms.系統」との相違は、ただの文字の出入に限らず、とくに「法華翻經後記」を含む巻第二の「諸師序集」においては、全体の体裁そのものにまで及んでいる。

以下、「諸師序集」にみる二系統の体裁の相違並びに夫々の対応関係を示してみると<sup>(31)</sup>、

東大寺図書館蔵古写本 (CE.1130)		国立国会図書館蔵刊本 (CE.1600)	
目次	題号	目次	題号
觀師序一	法花宗要序一 <sup>(32)</sup> 釋惠觀作	觀師序一	法華宗要序一 釋慧觀作
叡師序二	法花經後序 僧叡法師作	叡師後序二	法華經後序 僧叡法師作
顗師序三	法花經別行序 天台智者作	遠師序三	法華經序三 釋慧遠述
添品序四	添品法花序	翻經後記四	法華翻經後記四 釋僧肇記
基師序五	法華贊序 大乘窺基作	-	-
翻經記六	法花翻經記 釋僧肇	添品序五	添品法華序五
附出 無量義經序	無量義經序 <sup>(33)</sup> 荊州隱士劉虬作	無量義經序六	無量義經序 荊州隱士劉虬作
正經後記	正法花經記 出經後記	正法華記七	正法華經記 出經後記

「Pb.系統」では、「Ms.系統」の「顗師序三」と「基師序五」とを取り除き、新たに「遠師序三」を取り入れている。すなわち、①注〔釈書類〕序を省き、經〔典類〕序の構造に改めようとした刊本改編の構想を窺うことができる。さらには、「添品序」と「翻經(後)記」との順序を変えていることから、②『妙法蓮華經』関連の序・記を一まとめにしようとした刊本改良の意図を推求することができる。要するに、刊本事業の主眼がこの二点に置かれていたことは一見して明らかである。この点『法華傳記』は成立以来「Ms.系統」の形から — 「Pb.系統」の原型(model)たる形を経て — 「Pb.系統」の形に定まるまでの転換・過渡期(CE.1130-1600)において、何らかの理由による多少なる体裁の改編ないしは内容の改良が、少なくとも「要法寺版」の形成・修正時に一回施されたことが認められる。

とくに、日蓮によって撰述された二つの文献の夫々より、二系統の特徴的な相違箇所<sup>(34)</sup>が見出されることから、「Pb.系統」の原型たるものは、恐らく、十三世紀のある時期(CE.1258-1260)にすでに示されており、これが圓智によって見出され、彼がこれを会通し、「要法寺版」

<sup>(31)</sup> 『大正藏』の校勘記には、二系統の体裁の相違が詳述されておらず、また誤記【T.51p.53脚註⑩】も見られるため、「①・⑧・⑨」の原典に立ち返って、確認を行った。仮名使いは原文のママ。

<sup>(32)</sup> 「⑧」はこれを欠く。

<sup>(33)</sup> 【T.51p.54脚註⑥】「(依法花序分此中附出而已)+荊⑩」「①・⑧」も同様にある。

<sup>(34)</sup> 以下のa～dの四箇所。「【Ms.系統】①『一代聖教大意』≠【Pb.系統】②『後五百歳合文』」

a 「①<sup>受</sup>理味≠②<sup>受</sup>理味」、b 「①<sup>摩頂</sup>屬累此經言≠②<sup>慰勸</sup>付嘱(屬)梵本言」、

c 「①佛日西隱≠②佛日西入」、d 「①遺光照東北≠②遺耀將及東北」



に採択したがために、現在のような『法華傳記』の二系統が生み出されたものと考えられる。なお、この推論は、現存する『法華傳記』の状況、なかでも「Ph系統」において添削加増箇所が最も顕著で、かつ二系統を区分しうる決め手となるものが「法華翻經後記」であること、また、後代における「法華翻經後記」の引用文例を用字法に基づいて精査するなどといった書誌学的な観点からも容易に裏付けられると考える。

## §6 刊本の開版者圓智及び古写本の修繕者宗性について

刊本の開版者日性圓智（CE.1554-1614）は、文禄・慶長以来、活字印刷を盛んに行った諸寺院のなかで、最も豊富な出版内容を示している「要法寺版」開版事業の中心人物であったことが知られる。とくに、今日「要法寺版」として確認されている十数点のうち、数ある仏書のなかから彼が『法華傳記』を選び、最初に開版したということは実に興味深く、日蓮によって、日本国に於ける『法華經』の縁深き所以を闡明する未来記の一端抛として見出された「法華翻經後記」が本書に収録されていることに意義を求めた、彼の本書に対する格別な思念を窺うことができる<sup>(35)</sup>。

古写本の修繕者華嚴宗の学侶宗性<sup>(36)</sup>（CE.1202-1276?）は、多数の著作<sup>(37)</sup>を残しており、な

<sup>(35)</sup> 現存する「要法寺版」については、『日蓮宗辞典』の日性の項目に「今日「要法寺版」と確認されているものは次の三点を数える。慶長五年[CE.1600]刊行本に『①④法華經伝記』『②⑥倭漢皇統編年合運図』『③④教儀集註』が、慶長六年[CE.1601]刊行本に、日蓮聖人の伝記である『④①元祖蓮公薩埵略伝』（刊記は「慶長六冬下浣三日、本地院中板行」）が、慶長八年[CE.1603]刊行本に『⑥③倭漢皇統編年合運図』、慶長一〇年[CE.1605]刊行本に同じく『⑥④倭漢皇統編年合運図』『⑦①沙石集』（刊記は「慶長十乙巳年仲春下浣八日 円智校讎」）『⑧日本書記神代卷』『⑨⑩太平記』、慶長一二年[CE.1607]刊行本に『⑩⑩文撰』、慶長一八年[CE.1613]刊行本に『⑩⑩天台四教儀集註』（刊記は「慶長十八癸丑年八月 日 於京師要法精舎板行焉」）、『⑫倭漢皇統編年合運図』、慶長一九年[CE.1614]刊行本に『⑬法華經伝記』がある。しかしその後の刊行はない。』（『日蓮宗事典』p.657cd）とあり、また（川瀬一馬 [1933] pp.21-22）には「要法寺版として数へ得ると考へたものは、圓智自撰の開版書と要法寺内開版の刊語、及び證據ある刻本とを合して次の如くである。慶長五年刊 ①法華經傳記、慶長五年刊 ②倭漢皇統編年合運圖（初版）、慶長六年刊 ③元祖蓮公薩埵略轉、慶長八年刊 ④倭漢皇統編年合運圖（再版・三版）、慶長十年刊 ⑤沙石集、（慶長中刊）⑥沙石集、慶長十年刊 ⑦倭漢皇統編年合運圖（四版）、慶長十二年刊 ⑧文選（直江版）、（慶長中刊）⑨論語集解、慶長十八年刊 ⑩天台四教儀集註」とある。但し、『日蓮宗辞典』の『⑬法華經伝記』は「慶長十九年刊本能寺版」の誤り。丸囲みの記号及び〔…〕括弧内は自らが付したもの。なお、日性圓智については「第六十一回 日蓮宗教学研究発表大会」（於 身延山大学 平成二十年十一月一日）における研究発表『法華論』の底本に関する一考察 ― 法華翻經後記再考 ― の質疑応答の際に、身延山大学の寺尾英智博士よりご教示を頂いた。記して感謝申し上げる次第である。

<sup>(36)</sup> 「宗性はその著日本高僧傳要文抄や日本高僧傳指示抄等の奥書によつて逆算すれば、建仁元年[CE.1201]の誕生である。十三歳を以て出家し、南都に華嚴、因明、俱舍、法相等を研めた華嚴宗の學匠であり、常に東大寺の尊勝院に住した。…〈中略〉…宗性は本邦に於ける最古僧傳集の編者であると共に、又實に聖德太子の三經義疏に對する本邦最初の註釋者たる名譽を荷ふ學匠である。其の門に自稱華嚴兼律金剛欣淨三經學士凝然の出でたるは宜なる哉である。凝然の法華疏慧光記六十卷の完成（A.D.1314）は本書〔=法華經上宮王義疏抄〕より五六十年の後である。』（『佛解』10, pp.40c-41a [花山信勝 [1935]]）

かには、大委國上宮王私集『法華義疏』(T.56 no.2187)に対する日本最初現存最古の注疏『法華經上宮王義疏抄』一卷〔殘欠；寛元四年[CE.1246]以降成立〕(NB.14)をはじめ『法華經』関連の章疏十点<sup>(38)</sup>が知られるほか、日本最古の僧伝集『日本高僧傳指示抄』一卷〔建長元年[CE.1249]〕・『日本高僧傳要文抄』三卷〔建長三年[CE.1251]〕(NB.101)をはじめ今無き寶唱の『名僧傳』を抄出した『名僧傳抄』一卷(SZ.77 no.1523)や、『三寶感應錄並日本法華傳要文抄』一卷など数種の伝記類<sup>(39)</sup>が知られている。また、『俱舍論明思抄』(NB.86-88)の奥書に「文永二年<sup>(40)</sup>」とあることから本抄の撰述に先立って『法華傳記』の修繕が行われたことを知り得る。とくに、『法華傳記』とほぼ同じ体裁・構造<sup>(41)</sup>をもつ法藏(CE.643-712)集『華嚴經傳記』(五卷)の奥書からも彼の名を見出すことができる<sup>(42)</sup>。『法華傳記』と『華嚴經傳

※ 生没年に関しては諸説あり、(西光義遵 [1933] pp.223-235) 及び (平岡定海 [1958] p.269・[1960] p.537) では、健仁二年[CE.1202]から正応五年[CE.1292]までと、(太田次男 [1965] pp.170-174) では、建仁二年[CE.1202]から弘安一年[CE.1278]までとするが、筆者の確認では、宗性述『華嚴宗香薫抄』(七卷)第二と第三の末尾に「健[第二の奥書では律に作るが写本の誤読であろう]治二年[CE.1276]・・〈中略〉・・右筆法嚴宗末葉前權僧正宗性年齢七十五夏臘六十三」(T.72 no.2333 p.130b, l.26, p.131a, l.21)とあることから、七五歳までに生存していたことを知り得る。〔・〕括弧内は自らが付したもの。仮名使いは原文のママ。

- <sup>(37)</sup> 『佛解著目』p.389)では、現存本三五点を、『望佛』3, pp.2276c-2277a)では、一部を欠く完本でないものや、宗性のほか、に数人の手によるものなどを含め、七六点を挙げている。
- <sup>(38)</sup> 「法華經品釋三卷、同抄二卷、同上宮王義疏鈔殘缺一卷、法華諸宗通用抄二卷、法華玄贊文義次第一卷、舍利弗權實抄一卷、開權顯實抄三卷、一乘義秘抄一卷、十如是義必要抄一卷、三寶感應錄并日本法華傳要文抄一卷」(『望佛』3, p.2277a) 仮名使いは原文のママ。
- <sup>(39)</sup> 「名僧傳抄一卷、宋高僧傳要文抄、新編華嚴祖師傳二卷、日本高僧傳指示抄一卷、同要文抄三卷、三寶感應錄并日本法華傳要文抄一卷」(『望佛』3, p.2277a) 仮名使いは原文のママ。
- <sup>(40)</sup> 「文永二年乙丑八月五日酉時於海住山十輪院抄之畢。去夏五月十九日始清書之。・・〈中略〉・・右筆華嚴宗末葉法印權大僧都宗性年齢六十四夏臘五十三」(NBC, p.35) 仮名使いは原文のママ。前掲の注<sup>(27)</sup>参照。

<sup>(41)</sup> 一『法華傳記』並びに『華嚴經傳記』の構造分析 一

1. 部類増減第一	隱顯時異第二	傳譯年代第三	支 <sup>㊟</sup> 派別行第四	論釋不同第五	諸師序集第六
2. 部類	隱顯	傳譯	支流	論釋	
1. 講解感應第七	諷誦勝利第八	轉讀減罪第九	書寫救苦第十	聽聞利益第十一	依正供養第十二
2. 講解	諷誦	轉讀	書寫	雜述	

1. 『法華傳記』巻一 (T.51 no.2068 p.48c, l.27-p.49a, l.3)、【T.51 p.48 脚註㊟】「派=流㊟」

2. 『華嚴經傳記』巻一 (T.51 no.2073 p.153a, ll.12-13)、【T.51 p.153 脚註㊟】「㊟建治元年寫東大寺藏本、㊟正徳元年刊大谷大學藏本」

「諸師の『法華經』への經序を集めた「諸師序」と、在俗者に及ぶ『法華經』の聴聞の利益の「聴聞」、また供養のありさまを誌す「供養」、この三科が『華嚴經傳記』に比して多く、『華嚴經傳記』の第十「雜述」に対応する科がない。・・〈中略〉・・これはどちらか先立つ一方によって為されたものを踏襲しているとみてもよいであろう。」(中條道昭 [1978] p.94)

ちなみに、『華嚴經傳記』は『新編諸宗教藏總録』巻一に「(華嚴經)傳記五卷 已上 法藏述」(T.55 no.2184 p.1167c, l.12)とある。(・)括弧内は自らが補ったもの。

- <sup>(42)</sup> 『華嚴經傳記』巻五「建治元年[CE.1275]乙亥六月五日午時於當院家新彌勒堂。合[令?]寫本等奉讀之畢。願以此五卷披讀之微功。必爲彼三會得脫之良因耳。前權僧正宗性。聽衆。良曉得業。慶實法師。談義之後。即於當院家新學問所。爲散後日之不審。委記當時之次第而已。右筆。華嚴宗末葉沙門釋宗



記』との体裁・構造の近似することは、すでに種々の先行研究に論じられるところであるが、何れも関連性を指摘するに止まっており、両底本に直接宗性が係わっていることに関しては未だ論及されていない。以上の諸事例から鑑みて彼の著作に『法華經』関連の章疏が存することや、諸伝記類が知られることなど『法華傳記』を講読・研鑽するに至った必然性までは窺われるものの、『法華經上宮王義疏抄』に『法華義疏』の本文には論及されない「二十八品説」について『寶昌録』の説<sup>(43)</sup>を引くなどして詳しく論難していることから、彼がこの説に関してかなり熟慮していたことが知られる。しかしながら、すでに證眞が「法華翻經後記」を引用しており、宗性も「二十七品説」を擁護する立場をとっているため、「二十八品説」を唱える「法華翻經後記」に彼の手が加えられたとは考え難い。

何れにしても「法華翻經後記」が収録されている『法華傳記』の成立並びに日本伝来の経緯等に関しては依然として不明、かつ推定し得ないままである。但し、「法華翻經後記」の撰述年代に関しては、出典と目される文献のなかで、栖復の『法華經玄賛要集』（唐乾符年間）が最も新しく、日本に現存する『法華伝記』の最古の伝本が大治五年（一一三〇年）に書写されていることから、九世紀の後半から十二世紀の前半の間と推定することができる。

## §7 「慶長五年刊要法寺版」の書き下し

- I <sup>(44)</sup>(1)弘始八年[CE.406]の夏、天竺の沙門三藏法師耆婆鳩摩羅什、秦には童壽と言ふ。(2)長安大寺草堂の中に於て[道]生・[僧]肇・[道]融・[僧]叡等の八百餘人、四方の義學英秀二千餘人と、(3)再び斯の經を譯し、衆と俱に詳究せり。什、自ら梵本[=SPS. K]を執り、口に秦語に譯す。姚興、自ら舊經[=正法華經]を執り、(4)以て相讎へて新文を校定<sup>(45)</sup>す。文義

性。年齡七十四。夏菴六十二。」(T.51 no.2073 p.173a, ll.15-22) 各巻の奥書ごとに二回ずつ見出され(p.157c, p.161c, p.164c, p.170c)、計十回を数える。・・[・?]括弧内は自らが付したもの。

- <sup>(43)</sup>「尋云。兩家中。寶昌録次第分明也。所謂於弘始八年長安逍遙園草堂寺。譯此法花。令僧叡講之。叡開爲九軸。當時廿八品也。長安宮人請此品淹留在內云云」(NB.14 p.133a, ll.6-9)

※『寶昌録』(CE.514)における本説〔＝訳出当初の『妙法蓮華經』を二十八品とする説〕の記載有無は本録が現伝しないために確認できないが、「二十八品説」を支持する一典拠として注目に値する。なお、同説は、天台智者大師(CE.531[538]-597[598])説『妙法蓮華經文句』第八上に「寶昌經目云。・・〈中略〉・・鳩摩羅什。此翻童壽。是龜茲國人。以僞秦弘始五年四月二十三日。於長安逍遙園譯大品竟。至八年夏。於草堂寺譯此妙法蓮華。命僧叡講之。叡開爲九軸。當時二十八品。長安宮人請此品淹留在內。江東所傳止得二十七品。」(T.34 no.1718 p.114c, ll.18-26)、「寶昌の經目に云く、・・〈中略〉・・鳩摩羅什、此には童壽と翻ず、是れ龜茲國の人、僞秦の弘始五年四月二十三日を以て長安の逍遙園に於て大品を譯し竟ぬ、八年の夏に至て、草堂寺に於て此妙法蓮華を譯す、僧叡に命じて之を講ぜしむ、叡開て九軸と爲す、當時は二十八品なり、長安の宮人此品を請て淹留して内に在き、江東の傳ふる所は止だ二十七品を得るのみ。」(『国訳一切經』經疏部二、p.374 [辻森要修訳])と転載されている。

- <sup>(44)</sup> §7・§8の(1)～(16)の番号は、二系統の相違を分別し易くし、§9においては論拠として挙げるために便宜上付したものである。なお、§7・§8の書き下しは、修士論文の主査三友健容博士及び駒澤大学の池田魯參教授にご指導を頂いた。記して感謝申し上げる次第である。

- <sup>(45)</sup>「写本や印刷物を、原本や原稿とひき合わせてその誤りを正す。」(『新字源』p.504a)

- 俱に通じ、妙理再び中る。
- II 興、什に諮ふて曰く、君の所譯の二十八品を觀るに、(5)文義美明にして、宗體自ずと彰れる。乍ちに護の經[=正法華經]を觀るに、序品を以て稱して光瑞品と爲し、(6)藥草喩品の末に、其の半品を益す。化城喩品を往古品と題し、富樓那[=五百弟子受記品]及び法師[品]の初に、數紙の文を増す。(7)普門[品]の偈を闕略し、囑累[品]還て其の終に結す。未だ旨歸<sup>(46)</sup>を測らず。其の事如何。
- III (8)什曰く、善哉明主よ。法燈の長炎を續け、暗夜の迷景曉らむ。自ら發疑するに非ずんば、誰か深旨<sup>(47)</sup>を明らめんと。舊き梵文 [=SPS. K] を勘えるに、(9)宛も斯くの如し。予 [=羅什]、昔、天竺國に在りし時、遍く五竺に遊びて大乘を尋討し、大師須利耶蘇摩 [Sūryāsoma] に從ひて、理味を飡喫す。(10)慇懃に梵本を付囑して言く、佛日西に入り、遺耀將に東北に及ばんとす、茲の典 [=SPS. K]、東北に於て縁あり。汝、愼んで傳弘せよ。(11)昔、婆藪槃豆 [Vasubandhu] 論師。優婆提舍 [=妙法蓮華經優婆提舍] を製作す、是れ [=SPS. K] 其の [=SPS. V] 正本<sup>(48)</sup>なり [∴ SPS. K = SPS. V]、其の句偈を取捨すること莫れ、其の眞文を取捨すること莫れと。(12)予忿忿<sup>(49)</sup> 忝しく之れを飡受し、笈を負うて來到す。今傳ふる所、良に所以あり。宗旨を詮定<sup>(50)</sup>するに、異途ある可からず。
- IV (14)呂く聖旨<sup>(51)</sup>を恐れて、冥の可否を待つ、夢に遍吉 [=普賢] の可なりと稱するを感じ、深く佛旨に會ひ、具に釋義を爲す。(15)興主、膝を開き、義學伏膺<sup>(52)</sup>す。舊本 [=正法華經] を捨て、新文 [=妙法蓮華經] を翫び、覆勘<sup>(53)</sup>して再び授す。今、講肆<sup>(54)</sup>の次ぎに略して由來を記す。
- V 冀くば通方<sup>(55)</sup>の後賢、(16)其の差違を咎めざれ、流行の處必ず感應あり。

## §8 「東大寺図書館藏本」の書き下し

- I (1)弘始八年の夏、天竺の沙門三藏法師耆婆鳩摩羅什、(2)長安大寺草堂の中に於て[道]生・[僧]肇・[道]融・[僧]叡等の八百餘人、四方の義學二千餘人と、(3)斯の經を出し、衆と俱に詳究せり。什、自ら梵本の經 [=SPS. K] を手に執り、秦語に譯して曰ふ。興、自ら舊經 [=

(46) 「おもむき。旨趣。」(『大漢和辞典』5, p.743c)

(47) 「ふかいむね。おくそこの意味。奥旨。」(『大漢和辞典』7, p.42b)

(48) 「副本・謄本・譯本等のもととなつてゐる文書。」(『大漢和辞典』6, p.677b)

(49) 「いそがしいさま。あわただしいさま。」(『新字源』p.373b)

(50) 「事理を具さに説き、\*さだめる。」(『大漢和辞典』10, p.453b, 3, p.975a)

(51) 「聖人の意思。」(『大漢和辞典』9, p.203d)

(52) 「心に記して忘れない。」(『大漢和辞典』1, p.660b)

(53) 「調べなおす。くわしく調べる。」(『新字源』p.913b)

(54) 「研究する。講も肆も、きはまる。」(『大漢和辞典』1, p.557a)

(55) 「道術に通達する。四方に通ずる。世間一般に通ずる。」(『大漢和辞典』11, p.65bc)



- 正法華經]を手に執り、(4)以て相讎校<sup>(56)</sup>せり。新文にして舊と異なるは、義悉く圓通なり。
- II 興、曰く、若し所譯の二十八品を觀るに、(5)文義自ずと美なり。<sup>(57)</sup>乍ちに舊經[=正法華經]を見るに、(6)藥草[喻]品の末に、其の半品を益す。富樓那[=五百弟子受記品]及び法師[品]の初に、數紙の文を増す。(7)普門[品]の偈を闕略し、囑累[品]其の終に結す。未だ深意<sup>(57)</sup>を測らず。
- III (8)什曰く、善哉明君よ。法燈を長く續け、迷徒を開悟するは良し。舊き梵本[=SPS. K]を勸えるに、(9)斯くの如し。予、昔、天竺に在りし時、須利耶蘇摩[Sūryāsoma]に従ひて、理味を飡受す。(10)頂を摩でて此の經を屬累して言く、佛日西に隠れ、遺光東北を照らす、茲の典[=SPS. K]、東北に於て縁あり。汝、愼んで諸國に傳弘せよ。(11)昔、婆藪槃豆[Vasubandhu]菩薩。論[=妙法蓮華經優婆提舍]を製す、正に是れ[=SPS. K]斯の本[=SPS. V]なり[∴SPS. K≡SPS. V]、眞文を取捨すること莫れと。(12)吾 恭しく之れを飡稟し、今傳ふる所なり。宗旨を詮定するに、異途有る可からず。
- IV (13)一品[=藥草喻品]の半、二品[=五百弟子受記品・法師品]の初、古に有り今は無し。間に糅<sup>(58)</sup>る可からず。屬[累品]、[如來]神力[品]の後に次ぐ。亦た改移す可からず。普門[品]の偈と長行の乖違<sup>(58)</sup>せり。(14)聖旨を恐れて、冥の可否を待つ、夢に普賢の稱譽<sup>(59)</sup>を感じ、深く佛旨に會ひ、釋義を爲す。(15)王、即ち開解し、義學を伏膺す。覆勘重校し、是れを以て講の次ぎに於て、疏を以て記を爲す。
- V 冀くば通方の賢、(16)其の差を咎めざれ、新[=妙法蓮華經]依り研めるを以て規模<sup>(60)</sup>と爲すべし。

## §9 内容分析による検討並びに帰結

以下、内容分析による検討に先立って上記の書き下しとの重複を厭わず、内容の上で、五つの段落からなる「法華翻經後記」の摘要を記し全体の構造把握に便宜をはかりたい。

- I 『妙法蓮華經』の訳場、長安大寺草堂での様子が書き記される。姚興、羅什が口頭で訳す『妙法蓮華經』を聴聞しながら、『正法華經』との校定を行っている。
- II 姚興、羅什に『妙法蓮華經』と既存の『正法華經』とは幾分か相違のあることを指摘し、その所以を問い質す。
- III 羅什、姚興の学識あることに賞嘆し、自らが須利耶蘇摩に『法華經』の梵本を付嘱された

<sup>(56)</sup> 「二人相對し、原本に照らし合せて誤謬を校正する。」(『大漢和辞典』10, p.620a)

<sup>(57)</sup> 「ふかい心。ふかい意味。」(『大漢和辞典』7, p.39a)

<sup>(58)</sup> 「乖異に同じ。そむきたがふ。」(『大漢和辞典』1, p.349a)

<sup>(59)</sup> 「ほまれ。名譽。稱讃。ほめたたへること。」(『大漢和辞典』8, p.605c)

<sup>(60)</sup> 「ものの手本。」(『佛教語大辞典』p.208c)

ことや、この経が東北に縁あること、そしてこの梵本は世親の『法華論』の底本として使われるほど権威のあるものであることなど、請来梵本に関する一連の経緯を述べ、姚興の問いに答えている。

IV 姚興、羅什の答えを聞くもなお疑い晴れず、両本の異同を考えていたところ、夢のなかで普賢菩薩に会い、『妙法蓮華經』に皈依する。

V 両本の差異を咎めずして『妙法蓮華經』を弘通せよ、との旨が記される。

以上、二系統の書き下しを終え、諸資料を勘考した結果、文脈・内容の面から筆者がこれを偽作・偽撰であると断定するに至った幾種の論拠を挙げてみたい。

第一に、すでに検証済みである、本文11)において示される「両底本の同一本説」に対する記事と事実との不一致である。しかしこれには諸先生方からの様々な指摘を頂戴しており、例えば、正本というターム (term) を直ちに底本 (original text, source) と見做すには問題があるろう、又は、同本と異本とを言い得る基準が明確でない、といったものがその代表的な指摘となる。確かに「昔婆藪槃豆論師」から「莫取捨其眞文」までに限っては自流の解説を施したものである。

ちなみに、本箇所は、修士論文の副査伊藤瑞叡博士による書き下しがあり、以下にそれを記しておきたい。「昔、婆藪槃豆論師。優婆提舍を製作す、是れ其の正本なり、其の句偈を取捨すること莫れ、其の眞文を取捨すること莫れ、と。<sup>(61)</sup>」博士の著書には下線部を欠くが、後に博士より直にご教示を頂いたため、ここに自らが付する次第となった。なお、博士はこの一文を含む「予昔在天竺國時」から「今所傳良有所以」までを解し「羅什の翻訳は、最古の梵本による正統な相伝にもとづいた謬りなきもの」と評されている。また、『注法華經』の「結經」にも「昔在天竺國時」から「莫取捨其眞文」までが引用されており<sup>(62)</sup>、これは関戸堯海博士による現代語訳がある。以下、参考までにその訳文を引用しておきたい。「羅什三蔵はインドを遊歴して大乘仏教を求め、大師須利耶蘇摩から大乘の根本義を受け、須利耶蘇摩が羅什に「梵本法華經」を付嘱して語るには「釈尊が入滅されてその残照は東北の国に輝いている。『法華經』は東北の諸国に有縁の經である。これが天親菩薩『妙法蓮華經優波提舍』の正本である。『法華經』の句偈、眞文を恣意的に取捨してはならない」<sup>(63)</sup>」

一方、「㊶・㊸」には「正ニ是レ斯ノ本ナリ」とあり、㊹はこれを「其ノ正本ヲ是ス」と読

<sup>(61)</sup> (伊藤瑞叡 [1991] p.172)

<sup>(62)</sup> 『注法華經』「結經 74」<sup>1)</sup>碑公翻經記云。昔在天竺國時。遍遊<sup>2)</sup>於五竺尋討大乘。<sup>3)</sup>修大師須利耶蘇摩。食菓理味。殷懃付屬梵本言。佛日西入。遺耀<sup>4)</sup>照於東北。茲典有縁於東北<sup>5)</sup>諸國。汝慎傳弘。昔婆藪槃豆<sup>6)</sup>菩薩。製作優婆提舍。是其正本。莫取捨其句偈。莫取捨其眞文。」「㊶碑公→肇公 ㊷於→剩字 ㊸修→從 ㊹照於東北→將及東北 ㊺諸國→剩字 ㊻般豆→槃豆 ㊼菩薩→論師」(山中喜八 [1980] pp.625-626)

<sup>(63)</sup> (関戸堯海 [2003] pp.266-267)



み下している。また、㉞は「其ノ正本是ナリ」とも読めようが、何れにせよ筆者は、これらの異なる表現は内包する意趣を明瞭ならしめるがための筈跡に過ぎず、ここでいう「正本」とは「底本」以外には意をなさないとする(64)。

第二に、本文(4)において示される「二十八品説」である。周知の如く、訳出当初の『妙法蓮華經』とは、提婆達多品を欠く二十七品なるものであり、『妙法蓮華經』に対する中国撰述の現存する最古の注釈書である竺(65)道生の『妙法蓮華經疏』の目次(66)によってもこれが二十七品なるものであったことが確認できる。この事例から推知される「法華翻經後記」の成立は、これが「添品妙法蓮華經序」に示されるが如く(67)、提婆達多品が編入(68)された後に流行しだす、二十八品なる『妙法蓮華經』がその言及する対象になっていることから、訳出当時の僧肇によるものでないとするに異論を俟たない。したがって、「二十八品説」を唱える『寶唱録』に典拠をおいた後人の手に依る創作である可能性が考えられる(43)。また、記者を僧肇にしたのは、羅什と僧肇との格別なる関係を利用し、記事の権威を高め、信頼性を確報しようとした意図からであろうと推理される。

第三に、本文(7)及び本文(13)において、姚興が『正法華經』と『妙法蓮華經』との相違を述べているところにおいて、『妙法蓮華經』には普門品の偈が欠略し、『正法華經』にはまるで

(64) また「正本」には「天平宝字五年(七六二)の東院資財帳には、三經義疏(内二經の義疏は正本)以外にも、太子所用のものを多く行信が求め奉納しているが、額面通りに信ずることはできず、「正本」というのは、古筆家のいう「極書」のようなものにすぎない。」(田村晃祐[1987] p.133)と「極書」の意味があるようである。古筆家のいう「極書」とは、『古筆大辞典』に「古筆の真贋、筆者を書いたのを極書という。鑑定書ともいう。」(p.297c)とある。

(65) 【SZ.27 p.1 脚註①】「竺竺ニツクルベシ。●」

(66) (SZ.27 no.577 p.1a, ll.4-20)

(67) —「添品序」より見たる旧訳二本の相違について—

「而護所闕者。普門品偈也。什所闕者。藥草喻品之半。富樓那及法師等二品之初。提婆達多品。普門品偈也。什又移之囑累。在藥王之前。二本陀羅尼。並置普門之後。其間異同。言不能極。竊見提婆達多。及普門品偈。先賢續出。補闕流行。」(T.9 no.264 p.134c, ll.7-12)、「而して護の闕くる所は、普門品の偈なり。什の闕くる所は、藥草喻品の半ばと富樓那及び法師等の二品の初め、提婆達多品、普門品偈なり。什また囑累を移し藥王の前に在り。二本陀羅尼並びに普門の後に置く。其の間の異同、言極む能はず。竊かに提婆達多及び普門品偈を見るに、先賢続出して、闕を補ふて流行す。」(佐々木孝憲[1970] p.222) この記述により『添品妙法蓮華經』の訳出以前に「二十八品」なる『妙法蓮華經』がすでに世に流行していたことを窺い知る。詳しくは(布施浩岳[1935]・上村眞肇[1954])参照。なお、『添品妙法蓮華經』の増広に関しては『望佛』に「添品妙法蓮華經は又添品法華經とも稱し、隋仁壽元年(一説二年)闍那崛多及び笈多が長安大興善寺に於て共譯せしものに係り、亦二十七品あり。正法華經に同じく提婆達多品を合して第十一見寶塔品となし、又囑累品を最後に置き、第二十一品以下の順次を陀羅尼品、藥王菩薩本事品、妙音菩薩品、觀世音菩薩普門品、妙莊嚴王本事品、普賢菩薩勸發品、囑累品となし、藥草喻品の後半の文増廣せられ、普賢菩薩勸發品末に四十二字を闕略し、又陀羅尼品及び勸發品の呪を改譯せるも、其の他は章段字句全く羅什譯に一致せり。」とある。『望佛』5, p.4804c) 仮名使いは原文のママ。

(68) 『開元釋教錄』卷四に「妙法蓮華經八卷僧祐錄云新法華經初爲七卷二十七品後人益天授品成二十八弘始八年夏於大寺出僧叡筆受并製序第五譯見二秦錄及僧祐錄」(T.55 no.2154 p.512b, l.23)とある。

これがあるかのように述べられているが、「添品妙法蓮華經序」より知られる如く<sup>(67)</sup>、普門品の偈は『正法華經』にも欠けていることが判る。その他の相違に関しては、「添品妙法蓮華經序」の記事をそのまま引用し、反対なる動詞を用いて表現を変えているに過ぎない。但し、提婆達多品を欠としないことから、意図的に二十八品なる『妙法蓮華經』に仕立てようとした痕跡が見受けられる。推察するに、普門品の偈の問題は、「添品妙法蓮華經序」より『妙法蓮華經』に関する記事のみを引用し、『正法華經』に関する記事は見落としたことによる不備であると考えられる。なお、これらの不備に気付いたものか、後の刊本になるとこれに関する古写本の後半の記事（＝本文13<sup>(69)</sup>）全文が大胆に削除されてしまう。

以上の諸事例に基づき、これが僧肇の真撰でない、後人の手による偽作・偽撰であると結論付けることができると考える。最後に、僧肇記「法華翻經後記」を偽作・偽撰であるとするさらなる説に、「又法華玄論第二等に南齊劉虬の注法華經は僧肇等八師の説を集録せるものなることを記し、華嚴經探玄記第八に肇法師法華疏の名を出せるを以て見るに、師は亦法華經に就き注解を加えたるものとなすべきが如し。又法華傳記第二に釋僧肇記法華翻經後記を揚ぐるも、其の内容を驗するに後世の偽作なること明なり。<sup>(70)</sup>」とあるが、上記に論究してきた内容分析による検討の結果により、これらの偽作・偽撰説に対する明確な論拠が示されたことと考えられる。

(二〇〇九年二月稿)

(69) 

⑦ 一品半二品初古有今無不可間糅屬次神力後亦不可改移普門偈與長行乖

(70) 『望佛』4, p.3089b) 仮名使いは原文のママ。参考までに、僧肇に『法華疏』ありしことについては(常磐大定 [1941] pp.180-181)に詳しい。

### 〈参考文献〉

- 伊藤 瑞敏著 [2007] 『法華經成立論史 法華經成立の基礎的研究』（平楽寺書店、京都）  
伊藤 瑞敏著 [1991] 『法華經の眞実と救済』（隆文館、東京）  
伊藤 瑞敏稿 [1986] 「法華經成立論史（その二）」（『大崎学报』141、pp.22-65）  
伊藤 瑞敏稿 [1983] 「『法華論』より見たる『十地經論』の性格について 『法華論』の作者・訳者をも論明する」〔宮崎英修先生古稀記念論文集刊行会編 [1983] 『日蓮教團の諸問題』（平楽寺書店、京都、pp.1193-1228）〕  
惠谷 隆成稿 [1935] 「金沢文庫に現存せる天台古逸書に就いて」（『日本佛教學協會年報』7、pp.140-197）  
太田 次男稿 [1965] 「東大寺宗性の『白氏文集要文抄』について」（『斯道文庫論集』4、pp.87-174）  
大野 法道稿 [1914] 「僧肇の法華經觀」（『佛書研究』56、pp.8-10）  
上村 眞肇稿 [1954] 「普門品漢譯偈頌の添加について」（『印度學佛教學研究』2-2、pp.129-130）  
川瀬 一馬稿 [1933] 「要法寺版の研究」（『書誌學』1-1、pp.4-22）  
菅野 龍清稿 [1999] 「姚氏と仏教」（『大崎学报』155、pp.209-235）  
木村 光孝稿 [1940] 「法華經論に於ける二三の問題」（『宗教研究』2-1、pp.104-141）  
清田 寂雲稿 [1973] 「法華論と法華論科文について」〔天台學會編 [1973] 『傳教大師研究』（早稲田大學出版部、東京、pp.373-390）〕



- 西光 義遵稿 [1933]「親鸞聖人の彌勒觀 付東大寺宗性年譜」(『龍谷學報』305、pp.204-222, 223-235)
- 坂本幸男, 岩本裕訳注 [1962]『法華經』上 (岩波書店、東京)
- 佐々木 孝憲稿 [1970]「添品妙法蓮華經の訳出」{金倉 圓照編 [1970]『法華經の成立と展開 / 法華經研究 3』(平樂寺書店、東京、pp.221-250)}
- 常盤 大定著 [1941]『續支那佛教の研究』(春秋社松柏館、東京)
- Stefan Anacker [1984] *Seven Works of Vasubandhu*, Motilal Banarsidass, Delhi.
- 諏訪 義純訳 [1991]「梁高僧伝」{長尾雅人, 柳田聖山, 梶山雄一監修 [1991]『大乘仏典 中国・日本篇 第14巻 高僧伝』(中央公論社、東京、pp.9-28)}
- 関戸 堯海著 [2003]『日蓮聖人注法華經の研究』(山喜房佛書林、東京)
- 田村 晃祐稿 [1987]「三經義疏撰述の問題」{平川 彰編 [1987]『佛教研究の諸問題』(山喜房佛書林、東京、pp.129-146)}
- 塚本 善隆稿 [1955]「佛教史上における肇論の意義」{塚本 善隆編 [1955]『肇論研究 (京都大学人文科学研究所研究報告)』(法蔵館、京都、pp.113-166)}
- 中條 道昭稿 [1978]「華嚴經伝記研究(一)」(『駒沢大学大学院仏教学研究會年報』12、pp.93-104)
- 納富 常天稿 [1976]「東国仏教における外典の研究と受容(三) 称名寺湛睿を中心として」(『金沢文庫研究』22-4、pp.1-9)
- 納富 常天稿 [1970]「湛睿の基礎的研究 典籍資料を中心として」(『金沢文庫研究』16-1、pp.1-9)
- 平岡 定海著 [1960]『東大寺宗性上人の研究並史料』下巻 (日本學術振興會、東京)
- 平岡 定海稿 [1958]「日本仏教史上に於ける東大寺宗性上人の位置について 宗性上人の生涯を中心として」(『印度學佛教學研究』6-1、pp.268-272)
- 藤井教公, 池邊宏昭訳注 [2002]「世親『法華論』訳注(2)」(『北海道大学文学研究科紀要』108、pp.1-95)
- 藤井教公, 池邊宏昭ほか訳注 [2001]「世親『法華論』訳注(1)」(『北海道大学文学研究科紀要』105、pp.21-112)
- 布施 浩岳稿 [1935]「提婆品眞諦譯出説考」{佛誕二千五百年記念學會編 [1935]『佛教学の諸問題』(岩波書店、東京、pp.818-848)}
- 古田 武彦著 [1998]『古代は沈黙せず』(駸々堂出版、東京)
- 牧田 諦亮稿 [1955]「肇論の流伝について」{塚本 善隆編 [1955]『肇論研究 (京都大学人文科学研究所研究報告)』(法蔵館、京都、pp.272-298)}
- 松本 文三郎著 [1927]『佛典批評論』(弘文堂、京都)
- 馬淵 和夫編 [1985]『醍醐寺藏探要法花驗記』(武蔵野書院、東京)
- 丸山 孝雄著 [1978]『法華教学研究序説 吉藏における受容と展開』(平樂寺書店、京都)
- 三友 健容著 [2007]『アビダルマディーパの研究』(平樂寺書店、京都)
- 山中 喜八編著 [1980]『定本注法華經』下巻 (法蔵館、京都)
- 吉田 龍英著 [1941]『法華經研究』(青梧堂、東京)
- 立正大学宗学研究所編 [1952-1959]『昭和定本日蓮聖人遺文』全四巻 (身延久遠寺、山梨)
- 渡辺宝陽, 小松邦彰編 [1992-1996]『日蓮聖人全集』全7巻 (春秋社、東京)
- 総合佛教大辞典編集委員会編集 [2005]『総合佛教大辞典』(法蔵館、京都)
- 日蓮宗事典刊行委員会編集 [1999]『日蓮宗事典 復刻版』(日蓮宗新聞社、東京)
- 小川環樹, 西田太郎, 赤塚忠編 [1994]『角川 新字源 改訂版』(角川書店、東京)
- 諸橋轍次著 [1989-1990]『大漢和辞典 修訂第2版』(大修館書店、東京)
- 小野玄妙編纂 [1964-1988]『佛書解説大辞典 改訂版』全13巻・著者別書名目録・別巻 (大東出版社、東京)
- 川瀬一馬著 [1982]『日本書誌学用語辞典』(雄松堂書店、東京)
- 春名好重編著 [1979]『古筆大辞典』(淡交社、京都)
- 中村元著 [1975]『佛教語大辞典』上 (東京書籍、東京)
- 望月信亨編 [1954-1957]『望月佛教大辞典 増訂版』(世界聖典刊行協會、京都)

- 饒宗頤主編, 王素, 李方著 [1997] 『魏晉南北朝敦煌文獻編年』(新文豐出版公司、臺北)  
 上海古籍出版社, 法國國家圖書館編 [1994-2005] 『法國國家圖書館藏敦煌西域文獻』②(上海古籍出版社、上海)  
 柿市里子, 玉野井純子編 [1993] 「敦煌文獻目録 スタイン・ペリオ蒐集(漢文文獻編索引下巻)」(『東洋学研究』29)  
 金岡照光編 編集協力 河村孝照, 柿市里子 [1991] 「敦煌文獻目録 スタイン・ペリオ蒐集(漢文文獻編)」(『東洋学研究』25)  
 兜木正亨編 [1978] 『スタイン, ペリオ蒐集敦煌法華經目録』(靈友会、東京)  
 渋谷亮泰編 [1978] 『昭和現存天台書籍綜合目録 増補版』下(法藏館、京都)  
 日本書誌学会編 [1933] 『善本影譜』癸酉 第二輯 要法寺版專集之一「法華經傳記 二葉 倭漢皇統編年合運圖 七葉 文選 三葉」(日本書誌学会、東京)  
 佛書刊行會編纂 [1922] 『大日本佛教全書著者名目録』(大日本佛教全書發行所、東京)

〈略語〉

- Z 『大日本續藏經』  
 SZ 『新纂大日本續藏經』  
 T 『大正新脩大藏經』  
 S 『昭和法寶總目録』  
 NB 『大日本佛教全書』  
 NBC 『大日本佛教全書著者名目録』  
 STN 『昭和定本日蓮聖人遺文』  
 NZ 『日蓮聖人全集』  
 佛解 『佛書解説大辭典』  
 佛解著目 『佛書解説大辭典』著者別書名目録  
 望佛 『望月佛教大辭典』  
 善本影譜 『善本影譜』癸酉 第二輯 要法寺版專集之一  
 天台書目 『昭和現存天台書籍綜合目録』  
 兜木 『スタイン, ペリオ蒐集敦煌法華經目録』  
 東洋 25 「敦煌文獻目録 スタイン・ペリオ蒐集(漢文文獻編)」  
 東洋 29 「敦煌文獻目録 スタイン・ペリオ蒐集(漢文文獻編索引下巻)」  
 敦煌編年 『魏晉南北朝敦煌文獻編年』

〈キーワード〉 法華論、法華經伝記、法華翻經後記、僧肇、僧祥

〈付記〉

本稿は、平成二十年身延山大学での日蓮宗教学研究発表大会第六十一回における研究発表『法華論』の底本に関する一考察 ― 法華翻經後記再考 ― を改題し、配布資料を加除・修正したものである。また大会の質疑応答では、寺尾英智博士(身延山大学教授・第六十一回日蓮宗教学研究発表大会会長)、北川前肇博士(立正大学教授・立正大学仏教学部長)より貴重なコメントを頂くとともに、司会の福土慈稔博士(身延山大学教授)よりも激励のお言葉を頂戴した。資料調査にご協力頂いた立正大学大崎図書館の方々、庄司史生氏(立正大学大学院文学研究科仏教学専攻博士後期課程)、内藤善之氏(同上)、校正をお手伝い頂いた丸茂湛裕氏(日蓮宗新聞社)、吉村彰史氏(立正大学大学院社会福祉学研究科博士後期課程)、平野聡美氏(立正大学仏教学部仏教学科仏教文化専攻コース)、鈴木範子氏(佼成出版社)にこの場を借りて感謝の意を表したい。

とくに修士論文の主査三友健容博士からは、本稿に対するご意見を頂戴している。以下に記して今後の課題にしたい。

「偽作である」とすると、なぜこのような記述がなされる必要があったのかという目的が明らかになれなければならないであろう。この「法華翻經後記」のなかで固有名詞として出てくる姚興の存在が気になる。皇帝自らが翻訳場に現れ、『正法華經』を手にとって意見を言うことなど考えられるであ



ろうか。あり得ないとすると、皇帝の参加を記述することによって、『妙法蓮華經』に対する皇帝の並々ならぬ関心を示して『妙法蓮華經』の諸經典を越えた優位性と皇帝の非凡な才能を表現しようとしたことが考えられる。すなわち、『高僧傳』にみえる姚興は佛教信者として理想的な皇帝として表現されているが、実際は暴君として怖れられていたことは歴史家の一致した見解である。そうすると、「法華翻經後記」の記述は暴君姚興を熱心な佛教信者として位置付けるという目的があったとも考えられるのではないか。しかも、これを意図した姚興の忠実なる臣下は佛教に詳しくなかったがために、前述したような矛盾すらも気が付かなかったと考えれば辻褄が合ってくる。」

なお、三友健容博士は、著書『アビダルマディーパの研究』(pp.60-61)において「法華翻經後記」について触れている。

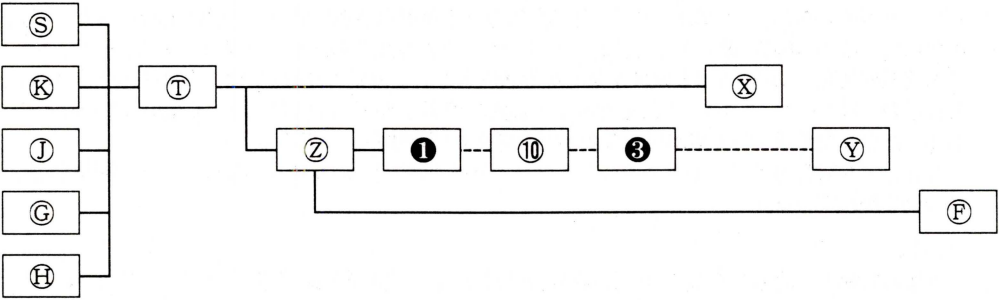
〈追記〉

本稿の脱稿後、間もなくして(伊藤瑞叡[1986] p.26)・(伊藤瑞叡[2007] p.23)に言及されている先行研究(松本文三郎[1927] pp.249-257)を見出した。先行研究の調査が不充分なために、本論において検討し得なかったことは甚だ無念であるが、筆者の論拠と符合するものもあれば、指摘されていないもの(§9の第一(=本文11))もあり、また、筆者には考え及ばなかった論拠もあったために、松本文三郎博士の論拠を以下に追記して本稿の論拠との対応関係を示しておきたい。

松本文三郎博士は「余輩の見る所によれば、此後記一篇は全然後人の偽作に係り、秋毫採るに足らざるものである。今左に簡単に其理由を述べやう。」として以下の六点の論拠を挙げている。

- (一) 経録・僧伝における不記載の問題 [= §3 参照]
- (二) 姚興の新文校定の問題 (=本文4)「姚興も亦譯場中の一人に加はり、舊經即ち正法幸の文と新たに羅什の口授する所とを比較し、新文を決定したらしく見える。併し是れは事實有り得べからざることである。當時譯場には四方の義學沙門三千餘人も集まつて居た、而して其譯場に於ける職分は各分擔せられたのであるから、國主姓興が之に臨むことはあつても、自から新文を校定する如きことの有り得べき筈はないのである。」なお、姚興の訳場参列に関しては(菅野龍清[1999] p.224)に「また、從來問題とされたのは、ここに記されているように姚興が実際に訳場に赴き訳出に参加していたのか否かという点である。確かに弘始三年から五年にかけて後秦は周辺地域と争乱状態にあり、特に後魏と後涼との戦闘が激化していた。したがって姚興に仏典翻譯という文化事業に携わる余暇など皆無に等しかったことは容易に想像できる。しかし、右の資料は姚興が『大品般若經』と『大智度論』訳出に常に参画していたことを示すものではなく、訳出に加わったこともあったということを示しているに過ぎない。つまり例え一度であつても秦王自らが訳場に赴いたという事実があつたということの特筆されているものと考えられる。」とある。
- (三) 普門品の偈・提婆達多品の問題 [= §9の第三(=本文7)・(13)・第二(=本文4) 参照]
- (四) 天竺の理解の問題 (=本文9)「彼の遍歷する所は主として西域地方であつて、印度に入つたとしても僅かに其西北境たる迦濕彌羅地方にあつたのみである、而もそれは年僅かに九歳の頃である。五天に遍歷し、大乘を尋討した抔といふことは羅什の口からいへるべき筈もなく、又親しく羅什に就き之を熟知する僧肇が筆にすべき筈もない。單に誇張の言としても、杜撰極まつたことである。」
- (五) 名前の表記の問題 (=本文1)「羅什の名の鳩摩羅耆婆(Kumārājīva)たることは古今佛教家の知らざるはない。而して支那人は之を略して鳩摩羅什となし、更に略して羅什とも稱するのであるが、什は即ち本と耆婆の音を寫したことは言ふまでもない。然るに此後記の作者は甚しく無學であつたと見へ、耆婆鳩摩羅什を以て其名として居る。如何にも奇怪至極のことといはなければならぬ。」
- (六) 後記の文章の問題「今此後記の文を見るに徒らに諸書を剽竊し、接續文を成し、庸陋にして些の翫賞に堪ゆるものもない。苟くも肇公の書を読むものは何人も一讀して容易に其贋たるを辯すべきである。」

〈付録〉「法華翻經後記」の出典・系統分類・後代の引用文例\*



<div>16 13</div>	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)	(11)	(12)	(13)	(14)	(15)	(16)
Y	3/3	3/3	5/5	4/4	3/3	4/4	4/4	5/5	6/6	5/5	5/5	6/6	0/6	5/5	5/5	3/3
3	-	-	-	-	-	-	-	-	5/6	5/5	-	-	-	-	-	-
10	-	-	-	-	-	-	-	-	5/6	5/5	5/5	-	-	-	-	-
1	-	-	-	-	-	-	-	1/5	5/6	5/5	-	-	-	-	-	-
F	1/3	1/3	5/5	3/4	3/3	4/4	3/4	2/5	5/6	3/5	5/5	4/6	6/6	5/5	1/5	-
Z	1/3	1/3	5/5	3/4	3/3	4/4	3/4	2/5	5/6	3/5	5/5	4/6	6/6	5/5	3/5	3/3
X	3/3	3/3	5/5	4/4	2/3	3/4	3/4	4/5	4/6	5/5	4/5	4/6	6/6	5/5	4/5	3/3
T	2/3	3/3	5/5	4/4	2/3	3/4	3/4	4/5	4/6	5/5	4/5	4/6	6/6	5/5	4/5	3/3
H	-	-	-	-	1/3	3/4	2/4	-	-	-	-	-	-	-	-	-
G	3/3	3/3	1/5	-	-	-	-	-	-	1/5	-	-	-	-	-	-
J	-	-	-	-	-	2/4	2/4	-	-	-	-	-	3/6	-	-	-
K	2/3	2/3	2/5	2/4	-	-	-	-	3/6	1/5	-	-	-	-	-	-
S	3/3	3/3	4/5	2/4	-	-	-	-	3/6	-	-	-	-	-	-	-

\* テキスト Y「要法寺版」慶長五年（CE.1600）圓智（CE.1554-1614）刊  
引用文例 3『後五百歳合文』文應元年（CE.1260）日蓮撰  
引用文例 10『注法華經』撰述年不明 日蓮自注（CE.1258-1260）  
引用文例 1『一代聖教大意』正嘉二年（CE.1258）二月十四日 日蓮（CE.1222-1281）撰  
引用文例 F『法華文句復眞鈔』撰述年不明 普寂（CE.1707-1781）述  
引用文例 Z『法華疏私記』建久頃（CE.1190-1198-）證眞述（『佛解』10, p.76a）参照。  
テキスト X「西教寺正教蔵文庫本」正慶二年（CE.1333）写  
テキスト T「東大寺図書館蔵本」大治五年（CE.1130）写  
出典 H『法華經玄贊要集』唐乾符年間（CE.879?）鏡水寺沙門栖復集  
出典 G『弘贊法華傳』唐神龍二年（CE.706）以降 藍谷沙門惠詳撰  
出典 1『添品妙法蓮華經序』隋仁壽元年（CE.601）岷多笈多二法師添品  
出典 K『高僧傳』梁會稽嘉祥寺沙門釋慧皎（CE.497-554）撰（CE.529）  
出典 S『出三蔵記集』梁釋僧祐（CE.445-518）撰（CE.504-518）



- (1) ⑤ 弘始八年夏。 天竺沙門三藏法師耆婆鳩摩羅什。 秦言童壽。  
 ⑥ 弘始八年夏<sup>(1)</sup>  
 ⑦ 弘始八年夏。<sup>(2)</sup>  
 ⑧ 弘始八年夏 天竺沙門三藏法師耆婆鳩摩羅什 秦言童壽  
 2/3 ⑨ 弘始八年夏 天竺沙門三藏法師耆婆鳩摩羅什 ■■■■  
 ⑩ 弘始八年夏<sup>(3)</sup> 天竺人也<sup>(4)</sup> 沙門鳩摩羅什<sup>(5)</sup> 此云童壽<sup>(6)</sup>  
 ⑪ 天竺人也<sup>(7)</sup> 鳩摩羅什<sup>(8)</sup> 此云童壽<sup>(9)</sup>  
 ⑫ 弘始八年夏<sup>(10)</sup> 天竺人也<sup>(11)</sup> 鳩摩羅什<sup>(12)</sup> <sup>(13)</sup>齊言童壽<sup>(14)</sup>
- (2) ① 於長安大寺草堂之中。 與生肇融叡等八百餘人。 四方義學英秀二千餘人。  
 ② 於長安 草堂  
 ③ 於長安 草堂  
 ④ 於長安大寺草堂之中 與生肇融叡等八百餘人 四方義學 二千餘人。  
 3/3 ⑤ 於長安大寺草堂之中 與生肇融叡等八百餘人 四方義學■■二千餘人  
 ⑥ 於長安大寺<sup>(15)</sup>  
 ⑦ 於長安大寺<sup>(16)</sup>  
 ⑧ 於長安大寺<sup>(17)</sup>  
 ⑨ 沙門僧習僧選法欽道流道恒道標僧叡僧肇等八百餘人<sup>(18)</sup>  
 ⑩ 沙門僧習僧選法欽道流道恒道標僧叡僧肇等八百餘人<sup>(19)</sup>

(1) 『法華文句復真鈔』卷第六「又肇公法華翻經後記云。」(NB.23 p.373b, ll.6-7)  
 (2) 『法華疏私記』卷第十本「又肇公法華翻經後記云。」(NB.22 p.211b, l.4)  
 (3) 『弘贊法華傳』卷第二 (T.51 no.2067 p.15b, l.16)  
 (4) 『弘贊法華傳』卷第二 (T.51 no.2067 p.15a, l.13)  
 (5) 『弘贊法華傳』卷第二 (T.51 no.2067 p.15a, l.13)  
 (6) 『弘贊法華傳』卷第二「沙門鳩摩羅什。此云童壽。天竺人也。」(T.51 no.2067 p.15a, l.13)  
 (7) 『高僧傳』卷第二 (T.50 no.2059 p.330a, l.11)  
 (8) 『高僧傳』卷第二 (T.50 no.2059 p.330a, l.11) 又は「初什一名鳩摩羅耆婆」(p.333a, l.7)  
 (9) 『高僧傳』卷第二「鳩摩羅什。此云童壽。天竺人也。」(T.50 no.2059 p.330a, l.11)  
 (10) 『出三藏記集』卷第八 (T.55 no.2145 p.57b, l.6)  
 (11) 『出三藏記集』卷第十四 (T.55 no.2145 p.100a, l.24) 又は「初什一名鳩摩羅耆婆」(p.102a, l.11)  
 (12) 『出三藏記集』卷第十四 (T.55 no.2145 p.100a, l.24)  
 (13) 『出三藏記集』卷第十四【T.55 p.100 脚註⑨】「齊=秦㊦㊧明」  
 (14) 『出三藏記集』卷第十四「鳩摩羅什。齊言童壽。天竺人也。」(T.55 no.2145 p.100a, l.24)  
 (15) 『弘贊法華傳』卷第二 (T.51 no.2067 p.15b, l.16)  
 (16) 『高僧傳』卷第二 (T.50 no.2059 p.332b, l.12)  
 (17) 『出三藏記集』卷第八 (T.55 no.2145 p.57b, ll.6-7) 又は、卷第十四 (p.101b, l.23) に同文。  
 (18) 『弘贊法華傳』卷第二 (T.51 no.2067 p.15b, ll.14-15)

- ⑤ 沙門僧肇<sup>(20)</sup>略僧邈 等八百餘人<sup>(21)</sup>
- ⑥ 更集四方義學沙門二千餘人
- ⑦ 集四方義學沙門二千餘人<sup>(22)</sup>
- (3) ① 俱再譯斯經。 與衆詳究。 什自執 梵本 口譯秦語。 姚興自執 舊經。
- ② 出斯經。 與衆詳究。 自執 梵本 譯秦語。 姚興自執 舊經
- ③ 出斯經。 與衆詳究。 什自執 梵本 口譯秦語。 姚興自執 舊經
- ④ 俱出斯經 與衆詳究 什自手執 梵本經 曰譯秦語 與自手執舊經
- 5/5 ⑤ 俱出斯經 與衆詳究 什自手執 梵本經 曰譯秦語 與自手執舊經
- ⑥ 譯出此經<sup>(23)</sup>
- ⑦ 更出斯經 與衆詳究 什自手執<sup>(24)</sup>胡經 口譯秦語<sup>(25)</sup>
- ⑧ 什持<sup>(26)</sup>梵本 與執舊經<sup>(27)</sup>
- ⑨ 什持<sup>(28)</sup>胡本 與執舊經<sup>(29)</sup>
- (4) ① 以相讎校定新文。 文義俱通。 妙理再中矣。 與諮什曰。 君觀所譯二十八品。
- ② 以相校定。 與曰。 若觀所譯二十八品
- ③ 以相校定。 與曰。 若觀所譯二十八品
- ④ 以相讎校 新文 異舊 義悉圓通 與曰。 若觀所譯二十八品
- 4/4 ⑤ 以相讎校 新文 異舊 義悉圓通 與 白 若觀所譯二十八品
- ⑥ 以相讎校其新文 異舊者義皆圓通<sup>(30)</sup>
- ⑦ 以相讎校其新文 異舊者義皆圓通<sup>(31)</sup>

(19) 『高僧傳』卷第二「+諮受什旨。更令出大品。」(T.50 no.2059 p.332b, ll.4-6)

(20) 『出三藏記集』卷第十四【T.55 p.101 脚註⑧】「略=摺明」

(21) 『出三藏記集』卷第十四「+諮受什旨更令出大品。」(T.55 no.2145 p.101b, ll.19-20)

(22) 『出三藏記集』卷第八 (T.55 no.2145 p.57b, l.7)

(23) 『弘贊法華傳』卷第二 (T.51 no.2067 p.15b, l.17)

(24) 『出三藏記集』卷第八【T.55 p.52 脚註⑩】「胡=梵<sup>(24)</sup>」

(25) 『出三藏記集』卷第八 (T.55 no.2145 p.57b, ll.7-8)

(26) 『高僧傳』卷第二【T.50 p.332 脚註④】「梵=胡<sup>(26)</sup>」

(27) 『高僧傳』卷第二 (T.50 no.2059 p.332b, l.6)

(28) 『出三藏記集』卷第十四【T.55 p.101 脚註⑦】「胡=梵<sup>(28)</sup>」

(29) 『出三藏記集』卷第十四 (T.55 no.2145 p.101b, ll.20-21)

(30) 『高僧傳』卷第二 (T.50 no.2059 p.332b, ll.6-7)、「羅什は梵本を持ち姚興は旧訳の經を執って、たがいに讎校した。その新文が旧(文)と異うところは、義がみな円通していることだった。」(諏訪義純[1991] p.23)

(31) 『出三藏記集』卷第十四 (T.55 no.2145 p.101b, ll.21-22)



- (5) ㉞ 文義美明宗體自彰。乍觀護經。以序品稱為光瑞品。  
 ㊦ 文義美。目 乍見舊經。以序品稱為光瑞。  
 ㉚ 文義美。目 乍見舊經 以序品稱為光瑞。  
 ㊧ 文義美 自 乍見舊經  
 2/3 ㊦ 文義美■■■■自■ 乍見舊經 ■■■■■■■■■■  
 ㊦ 言序品等者然名也正法華經云光瑞品<sup>(32)</sup>
- (6) ㉞ 藥草喻品末益其半品。 化城喻品 題往古品。 富樓那及法師初。 增數紙文。  
 ㊦ 藥艸 品末益其半品。 化城喻品。 題往古品 富樓那及法師初 增數紙文。  
 ㉚ 藥草 品末益其半品。 化城喻品 題往古品。 富樓那及法師初 增數紙文。  
 ㊧ 藥草喻品末益其半品。 富樓那及法師初 增數紙文  
 3/4 ㊦ 藥草■品末益其半品 ■■■■ ■■■■ 富樓那及法師初 增數紙文  
 ㊦ 藥草 品 半日光喻<sup>(33)</sup>  
 ㊦ 藥草喻品更益其半<sup>(34)</sup>  
 ㊦ 化城喻品正法華云往古品<sup>(35)</sup>  
 ㊦ 富樓那及法師等<sup>(36)</sup>  
 ㊦ 富樓那及法師等二品之初<sup>(37)</sup>
- (7) ㉞ 闕略普門偈。囑累還結其終。未測旨歸。其事如何。  
 ㊦ 闕略普門偈 囑累 結 終。未測深意。  
 ㉚ 闕略普門偈。囑累 結 終。未測深意。  
 ㊧ 略闕普門偈 屬累 結其終 未測深意  
 3/4 ㊦ 闕略普門偈 屬累■結其終 未測深意 ■■■■  
 ㊦ 普門偈頌也<sup>(38)</sup>
- <sup>(32)</sup> 『法華經玄贊要集』卷第六「言序品等者。然名也。正法華經云光瑞品」(SZ.34 no.638 p.290b, l.12)  
<sup>(33)</sup> 『法華經玄贊要集』卷第六「七隨所添藥草品半日光喻」(SZ.34 no.638 p.292c, l.15) 又は卷第一「經廢立。藥草品加日光喻。普門偈頌也」(SZ.34 no.638 p.197a, l.13)  
<sup>(34)</sup> 「添品妙法蓮華經序」(T.9 no.264 p.134c, ll.16-17) 又は「藥草喻品之半」(T.9 no.264 p.134c, l.8)  
<sup>(35)</sup> 『法華經玄贊要集』卷第六「化城喻品。正法華云往古品」(SZ.34 no.638 p.290b, l.14)  
<sup>(36)</sup> 『法華經玄贊要集』卷第六「言又云富樓那及法師等者。且如添品法華經中五百弟子授記品。及法師品。此二品初加三四帛經文。今妙法蓮華經中兩品。對他添品法華經中兩品。初皆闕少。又云。妙法蓮華經中兩品。是添法華兩品。闕少應檢。既無誠文。理難依信。」(SZ.34 no.638 p.301c, ll.19-23)  
<sup>(37)</sup> 「添品妙法蓮華經序」(T.9 no.264 p.134c, ll.8-9 or l.16)  
<sup>(38)</sup> 『法華經玄贊要集』卷第一「經廢立。藥草品加日光喻。普門偈頌也。」(SZ.34 no.638 p.197a, l.13) 又は卷第六「言又云觀音普門等者。標有無也。什公所譯。只有前長行。無偈文也。或有安者。後人添足」(SZ.34 no.638 p.300a, ll.20-21)

- ① 普門品偈也<sup>(39)</sup>  
 ② 意言我將囑累品在經終<sup>(40)</sup>  
 ③ 囑累還結其終<sup>(41)</sup>

(8) ④ 什曰。善哉 明主續法燈長炎。曉暗夜迷景。自非發疑。誰明深旨。勘舊梵文。

③ 法華翻經後記云<sup>(42)</sup>

⑩ 碑公翻經 記云<sup>(43)</sup>

① 法華翻經後記云釋什三藏也對姚興王曰<sup>(44)</sup>

⑤ 什曰 善哉。明君 勘舊梵文

⑥ 什曰 善哉 明君。 勘舊梵文

⑦ 什曰 善哉 明君良續法燈長 開悟 迷徒 勘舊梵本

4/5 ⑧ 什曰 善哉 明君良續法燈長 開悟 迷徒 勘舊梵本

(9) ④ 宛若斯。予昔在天竺國。時 遍遊五竺。尋討大乘。從大師須利耶蘇摩。飡稟理味。

③ <sup>(45)</sup>予昔在天竺國 時 遍遊五竺 尋討大乘從於大師須利耶蘇摩 飡稟理味<sup>(46)</sup>

⑩ 昔在天竺國 時遍遊於五竺 尋討大乘 修大師須利耶蘇摩 飡稟理味<sup>(47)</sup>

① 予昔在天竺國<sup>(48)</sup>時 遍遊五竺 尋討大乘 從大師須梨耶蘇摩 飡受理味<sup>(49)</sup>

<sup>(39)</sup> 「添品妙法蓮華經序」(T9 no.264 p.134c, l.9)

<sup>(40)</sup> 『法華經玄贊要集』卷第六「言六塔無還處等者。意言我將囑累品在經終。分身多寶。一時歸也。若多寶塔在囑累品中。閉塔坐迄至終」(SZ.34 no.638 p.298a, ll.11-13)

<sup>(41)</sup> 「添品妙法蓮華經序」(T9 no.264 p.134c, l.18)

<sup>(42)</sup> 『後五百歲合文』(STN.3 no.11 p.2294, l.4)、「法華翻經後記云昔在天竺國時遍遊五竺尋討大乘從於大師須利耶蘇摩飡稟理味慇懃付屬梵本言佛日西入遺耀將及東北。茲典有緣於東北國。汝慎傳弘文。」(STN.3 no.11 p.2294, ll.4-6)

<sup>(43)</sup> 『注法華經』「結經 74」①碑公→肇公(中山喜八 [1980] p.625)、「碑公翻經記云。昔在天竺國時。遍遊於五竺尋討大乘。修大師須利耶蘇摩飡稟理味。慇懃付屬梵本言。佛日西入。遺耀照於東北。茲典有緣於東北諸國。汝慎傳弘。昔婆藪般豆菩薩。製作優婆提舍。是其正本。莫取捨其句偈。莫取捨其真文。」(山中喜八 [1980] pp.625-626)

<sup>(44)</sup> 『一代聖教大意』(STN.1 no.10 p.68, l.10)、「法華翻經後記云釋僧肇記什羅什三藏也對姚興王曰予昔在天竺國時遍遊五竺尋討大乘從大師須梨耶蘇摩飡受理味摩頂屬累此經言佛日西隱遺光照東北。茲典有緣東北諸國。汝慎傳弘文。」(STN.1 no.10 p.68, ll.10-12)、「法華翻經の後記に云く(釈僧肇記)「什(羅什三藏なり)姚興王に対して曰く、予昔天竺国に在りし時遍く五竺に遊びて大乘を尋討し大師須梨耶蘇摩に従つて理味を飡受するに頂を摩でてこの經を属累して言く、仏日西に隠れ遺光東北を照らす。茲の典東北諸国に有縁なり。汝慎んで伝弘せよ」と、文。」(NZ.3 p.64)

<sup>(45)</sup> 『後五百歲合文』【STN.3 p.2294 脚註①】「(肇公於中印度見之) + 予④」

<sup>(46)</sup> 『後五百歲合文』(STN.3 no.11 p.2294, ll.4-5)

<sup>(47)</sup> 『注法華經』「結經 74」②於→剩字 ③修→從(中山喜八 [1980] p.625)

<sup>(48)</sup> 『一代聖教大意』【STN.1 p.68 脚註①】「[時] -④」

<sup>(49)</sup> 『一代聖教大意』(STN.1 no.10 p.68, ll.10-11)



- ⑦ 若斯。予昔在天竺 時。遍遊五竺。 從 須利耶蘇摩。 食受理味。
- ② 若斯。予昔在天竺 時。遍遊五竺。 從 須利耶蘇摩 食受理味。
- ⑧ 若斯 予昔在天竺 時 從 須利耶蘇摩 食受理味
- 4/6 ① ■若斯 予昔在天竺■ 時 ■■■■ ■■■■ 從■■■須利耶蘇摩 食受理味
- ⑧ 研覈大小往復移時<sup>(50)</sup>
- ⑧ 弟字須耶利蘇摩<sup>(51)</sup>
- ⑤ 又從須利耶蘇摩諮稟大乘<sup>(52)</sup>

- (10) ⑤ 慰勸付囑梵本言。佛日西入。遺耀將及東北。茲典有緣於東北。■■ 汝愼傳弘。
- ③ 慰勸付屬梵本言 佛日西入 遺耀將及東北 茲典有緣於東北 國 汝愼傳弘<sup>(53)</sup>
- ⑩ 慰勸付屬梵本言 佛日西入 遺耀照於東北 茲典有緣於東北 諸國 汝愼傳弘<sup>(54)</sup>
- ① 摩頂屬累此經言 佛日西隱 遺光 照 東北 茲典有緣 東北 諸國 汝愼傳弘<sup>(55)</sup>
- ⑦ 囑 此經言。 茲典有緣於東北 諸國。汝愼傳弘。
- ② 囑 此經言。 茲典有緣於東北 諸國。汝愼傳弘。
- ⑧ 摩頂屬累此經言 佛日西隱 遺光 照 東北 茲典有緣於東北 諸國 汝愼傳弘
- 5/5 ① 摩頂屬累此經言 佛日西隱 遺光 照 東北 茲典有緣於東北 諸國 汝愼傳弘
- ⑧ 東出<sup>(56)</sup>
- ⑧ 東土<sup>(57)</sup>

<sup>(50)</sup> 『高僧傳』卷第二「於是研覈大小往復移時。什方知理有所歸。遂專務方等。」(T.50 no.2059 p.330c, Ⅱ.20-21)、「是に於て大小を研覈し、往復して時を移し、什方に理を歸する所あるを知りて、遂に専ら方等を務む。」(『国訳一切經』史傳部七、p.32〔常磐大定 訳 古田和弘 校訂〕)

<sup>(51)</sup> 『高僧傳』卷第二「莎車王子・參軍王子兄弟二人。委國清從而爲沙門。兄字須利耶跋陀。弟字須耶利蘇摩。蘇摩才伎絕倫專以大乘爲化。其兄及諸學者皆共師焉。什亦宗而奉之。親好彌至。」(T.50 no.2059 p.330c, Ⅱ.13-16)「莎車王子・參軍王子の兄弟二人あり。國を委ねて、從ひて沙門たらんことを清う。兄の字は須利耶跋陀、弟の字は須耶利蘇摩なり。蘇摩は才伎倫を絶し、専ら大乘を以て化を爲し、其の兄及び諸の學者皆共に焉を師とす。什も亦宗として之を奉じ、親好彌至る。」(『国訳一切經』史傳部七、p.32〔常磐大定 訳 古田和弘 校訂〕)

<sup>(52)</sup> 『出三藏記集』卷第十四「又從須利耶蘇摩諮稟大乘。」(T.55 no.2145 p.100c, Ⅱ.6-7)

<sup>(53)</sup> 『後五百歲合文』(STN.3 no.11 p.2294, Ⅱ.5-6)

<sup>(54)</sup> 『注法華經』「結經 74」④「照於東北→將及東北 ①諸國→剩字」(中山喜八 [1980] pp.625-626)

<sup>(55)</sup> 『一代聖教大意』(STN.1 no.10 p.68, Ⅱ.11-12)

<sup>(56)</sup> 『弘贊法華傳』卷第二「後什母謂什曰。方等深教。應大闡眞丹。傳之東出。唯爾之力。尋與母別。」(T.51 no.2067 p.15a, Ⅱ.29 - p.15b, Ⅱ.1-2)「後什の母、什に謂ひて曰く、「方等の深教を大に眞丹に闡くべし。之を傳へて東出せしむるは。唯爾の力のみ」と。尋いで母と別る。」(『国訳一切經』史傳部十七、p.212〔梶芳光運訳〕)

<sup>(57)</sup> 『高僧傳』卷第二「什母臨去謂什曰。方等深教應大闡眞丹。傳之東土唯爾之力。但於自身無利。其可如何。」(T.50 no.2059 p.331a, Ⅱ.8-10)、「羅什の母は去るに臨んで羅什に向かっていった、「方等は深い教である大に眞丹に闡なさい。これを東土に伝えるのはただ爾の力だけである。しかし、(お前)自身にとって利なことではない。一体どうするのか」と。」(諏訪義純 [1991] p.15)

- (58) 『注法華經』「結經 74」 「2 般豆→槃豆」 3 菩薩→論師 (中山喜八 [1980] p.626)
- (59) 「添品妙法蓮華經序」 (T.9 no.264 p.134c, l.8)
- (60) 「添品妙法蓮華經序」 (T.9 no.264 p.134c, ll.8-9 or l.16)
- (61) 「添品妙法蓮華經序」 (T.9 no.264 p.134c, ll.17-18)
- (62) 「添品妙法蓮華經序」 (T.9 no.264 p.134c, ll.9-10) 【T.9 p.134 脚註①】「又=乃明」



- (14) ⑤ 呂恐聖旨。待冥可否。夢感遍吉稱可。深會佛旨。具爲釋義。  
 ⑥ 恐聖旨 待冥可否。夢感普賢稱譽 深會聖旨。具爲釋疑。  
 ⑦ 恐聖旨 待冥可否。夢感普賢稱譽。深會佛旨。具爲釋義。  
 ⑧ 恐聖旨 待冥可否 夢感普賢稱譽 深會佛旨 具爲釋義  
 5/5 ⑨ ① 恐聖旨 待冥可否 夢感普賢稱譽 深會佛旨 具爲釋義
- (15) ⑤ 與主開蒙。義學伏膺。捨舊本翫新文。覆勘再授。 今講肆次略記由來。  
 ⑥ 王卽開解。義學伏膺<sup>(63)</sup>  
 ⑦ 王卽開解。義學伏膺。 是以於講 次疏以爲記。  
 ⑧ 王卽開解 義學伏膺 覆勘重校 是以於講 次疏以爲記  
 4/5 ⑨ ① 王卽開解 義學伏膺 ■■■■■■ 覆勘重校 是以於講 ■次疏以爲記
- (16) ⑤ 冀通方之後賢。不咎其差違。流行之處。必有感應矣  
 ⑥ 冀通方之 賢。不咎其差材。 依新 以爲規模矣。<sup>(64)</sup>  
 ⑦ 冀通方之 賢 不咎其差 研依新 以爲規模矣  
 3/3 ⑨ ① 冀通方之 ■賢 不咎其差 ■ 研依新 以爲規模矣

(以 上)

<sup>(63)</sup> 『法華文句復真鈔』卷第六「+云云。」(NB.23 p.373b, l.19)

<sup>(64)</sup> 『法華疏私記』卷第十本「+已上略抄」(NB.22 p.212a, l.1)